

第6章 関連文化財群に関する事項

(1) 関連文化財群の定義

地域や歴史的なつながり等共通のテーマで文化財とその周辺環境を含め、それらを一体として価値づけできる文化財等のまとまりを関連文化財群という。

(2) 関連文化財群設定の意義

文化財群として取り扱うことによって、未指定文化財についても構成要素としての価値づけが可能となるほか、相互に関連した文化財の多面的な価値を見出すことができる。これにより、単体の文化財だけではなく、文化財の周辺環境やそれに関わる人の活動をも評価でき、所有者や地域住民が文化財の保存と活用に関わっていくことのきっかけとなることを期待するとともに、観光客等にも新たな魅力を提示することで、地域振興の一助となることを目指す。

(3) 関連文化財群設定の考え方

津山市域は、和銅6(713)年の美作国設置以降、常に美作国の政治・経済・文化の中心としての役割を果たしてきた。また、美作国は西日本では数少ない内陸であったことから、特徴のある歴史文化を形成してきた。そのため、現在の岡山県内においても、美作地域は独特の存在感を有している。

そこで、関連文化財群共通のテーマを「日本最西端の内陸国」として、さらに第3章で5つに整理を行った歴史文化をサブタイトルとして位置付け、有形・無形、指定の如何を問わず地域に残る歴史文化をその特徴や歴史的、地域的な関連に基づいた一定のまとまりとして、次の関連文化財群を設定した。

津山市外の構成文化財についても、ストーリーを語るうえで欠かすことのできないものであるとの認識から記載している。これらの文化財の保存活用については津山市が直接取り組むことができるものではないが、何らかの形で関係自治体などと連携を行う必要がある。

(4) 関連文化財群の保存活用に関する方針

関連文化財群のそれぞれのストーリーには、地域の豊かな歴史文化を体現している。これらの中には、観光分野で活用できるもの、新たな地域産業の創出につながるものも多くある。関連文化財群の魅力や特に来訪者(海外を含む)の視点に立った価値を見極めたうえで、観光産業や地域ブランドの創出等関連文化財群を活かすための事業戦略を立てることとする。また、関連文化財群を活かした事業を進めるには民間のプレーヤーの存在が欠かせないことから、これら

の人材育成のための事業を行う。最後に関連文化財群をよりわかりやすくするための個々の構成文化財の修繕やガイダンス施設の整備などハード面での事業を実施する。

(5) 関連文化財群一覧

歴史文化の特徴	タイトル	ストーリーの概要
1 自然とともに生きる	日本三大局地風 江戸風	日本三大局地風の一つと呼ばれる江戸風は、日本海から那岐山系を越えて吹き降ろすことで発生するおろし風である。地域の集落は防風林を植え、江戸風に備えている家屋が多くみられるなど、景観や人々の生活に大きな影響を与えている。
	城とまちを支えた 津山石	津山盆地の南に位置する神南備山付近に分布する凝灰岩石材である「津山石」は、津山城の石垣だけでなく城下町でも利用され、城とまちを支えた。
	☆ 中国山地の製鉄所 鉄の遺構群	鉄は人々の生活に欠かすことのできないものであることは言うまでもない。市街地北部の旧加茂町ではその鉄とかかわりのある地形が各所に残っている。古代から近世にかけて砂鉄が採集された跡である。この地域の人々の生活は製鉄と切り離すことのできない環境の上に成り立っている。
	地域のよりどころ むらのまつり	春は田植えの季節であり、農作業の始まりである。御田植祭が行われ五穀豊穡を祈願する。夏には、各地域で虫送りや風除けの行事が行われているところがある。秋には豊作を感謝して祭りが行われ、農閑期である冬にも盗難除けやマムシ除けの祭りが行われている。
2 悠久の歴史と文化のふりさ	☆ 法然ゆかりの立石家	法然上人の出自である漆間氏の本家である立石家は古代に九州の宇佐から美作へ移り住み、代々美作国二宮である高野神社の宮司として二宮の地に住み続けている。戦国時代には居住地背後の美和山1号墳を改変して美和山城を築き、詰めの城とした。江戸時代には宮司・大庄屋として地域に貢献し、近代には実業家として自宅敷地内に鉄道を敷設する等、津山地区の近代化に大きく貢献した。
	ここが違う中山造 (神社建築の世界)	美作国一宮の中山神社は、尼子晴久により建設された「中山造」と呼ばれる独特の建築様式を持っている。「方三間、入母屋造、妻入、唐破風の向拝」という外観で特徴付けられ、美作を中心に分布している。中山神社以外は江戸時代前半に主として藩主森長継により建設されており、津山市周辺の神社建築の特徴となっている。
3 歴史と文化の交差点	航路ネットワーク 吉井川と高瀬舟	美作の地は、豊富な森林資源の供給地として知られていた。その森林資源を活用して、古代以来の製鉄に加え、紙漉きが行われ、また木材加工を仕事とする木地師が活動していた。それらの生産品は、河川を利用した高瀬舟や陸路である街道（姫路から松江にいたる、出雲街道等）を通じて、畿内をはじめとした全国各地へと送られた。また、これらの物流に伴い江戸や上方の文化がもたらされ、河川や街道は、津山の物と文化を支える重要な交通路であった。吉井川と高瀬舟について記述する。
	☆ おいしい 津山の食文化	津山地域は江戸時代からの「養生食い」の習慣があり、古くからの肉文化を今に伝えている。また、城下町においては、森・松平を通じて茶の湯文化に伴う和菓子の伝統が伝わっている。これら江戸時代以来の食文化は現在の津山市の風土を形成する重要な要素となっている。
4 江戸の面影を残す津山城下町	◎ 城下町を守る社寺	津山城下町は、東・北・西側を社寺で取り囲むような配置の城下町としている。城下町の中には城下惣鎮守である徳守神社・藩主森家ゆかりの寺である妙願寺があるのみで、それ以外の社寺は東・西・北の城下町縁辺に配置している。特に西寺町は出雲往来沿いに広大な敷地を有しており、いざというときの兵溜まりの役割を果たすような構造となっている。
	◎ 城下町の活気がよみがえるまつり	祭りは神事であるとともに、氏子たちが総出で行う神輿神幸やだんじりの巡行等があり、神輿をかつくもの、だんじりに乗るもの、まつりの警備をするもの、神輿等を修理するもの等、地域の多くの人達が関わってきた。さらに祭りは、イベントとしての側面を持っており、地域の人だけでなく多くの観光客が津山を訪れている。
5 今に伝わる津山の近代化	☆ 山陰と山陽をむすぶ 鉄道の夢 ～津山の鉄道文化財が語る人と歴史のドラマ～	津山を経由する山陰山陽連絡鉄道計画は明治22(1889)年に始まり、明治25(1892)年に公布された「鉄道敷設法」に条文化された。津山に陸蒸気があったのは明治31(1898)年で、陰陽連絡鉄道の結節点になったのは昭和7(1932)年、東西南北鉄道交通の要衝となったのは昭和11(1936)年であった。その後も新駅開業に向けた運動が起こる等、美作には鉄道に賭けた人々の夢とドラマが溢れている。鉄道記念物・旧津山扇形機関車庫と転車台をはじめとする津山圏内の鉄道建造物等は、継承すべき近代化の証人であり文化遺産である。
	日本の近代化を支えた 津山の洋学	江戸時代、幕府はいわゆる「鎖国」政策によって海外との交流を厳しく制限し、西洋諸国では唯一オランダだけに貿易を許した。そのため、西洋の学問はオランダを通じて日本へもたらされ、「オランダ(和蘭・阿蘭陀)の学問」、「蘭学」と呼ばれた。やがて幕末にいたり、開国して様々な国の言葉や文化が伝わると、それらを含めて「西洋の学問」、「洋学」と呼ばれるようになっていく。津山藩からは、こうした蘭学・洋学を学び、日本の近代化に貢献した、優れた洋学者が数多く生まれている。西洋内科学から植物学、化学をはじめて日本に紹介した宇田川家三代や、ペリー来航時にアメリカの国書を翻訳した箕作阮甫らである。江戸詰の藩医であった彼らは、江戸を舞台に活躍したが、国元津山にも足跡を残している。また、彼らの活躍に影響を受けて洋学を学び、地域の医療や教育に尽くした人物もあり、各地にゆかりの史跡や資料が残されている。「津山の洋学」は、江戸後期から明治初期にかけての津山を語るうえで、欠かすことのできない歴史である。

☆は本事業計画期間内において、具体的な措置を予定している関連文化財群を表す。

◎は本事業計画期間内においては、文化財保存活用区域での措置を予定している。

(6) 関連文化財群

関連文化財群① 日本三大局地風 広戸風

概要

広戸風は、那岐山のふもとにあたる、津山市東部（主に勝北地区）、奈義町、勝央町のごく一部（数キロの範囲）で吹く局地風である。当地域では日本三大局地風の一つと呼ばれており、日本海から鳥取県の千代川に沿って風が吹き込み、V字谷で収束され、那岐山系（那岐山 1,255m、滝山 1,197m、広戸仙 1,115m など）を越えて吹き降ろすことで発生する、おろし風である。この地域の集落は、北側に「こせ（木背・戸背）」と呼ばれる防風林を植えて、広戸風に備えている家屋が多くみられるなど、景観や人々の生活に大きな影響を与えている。

ストーリー

■広戸風のメカニズム

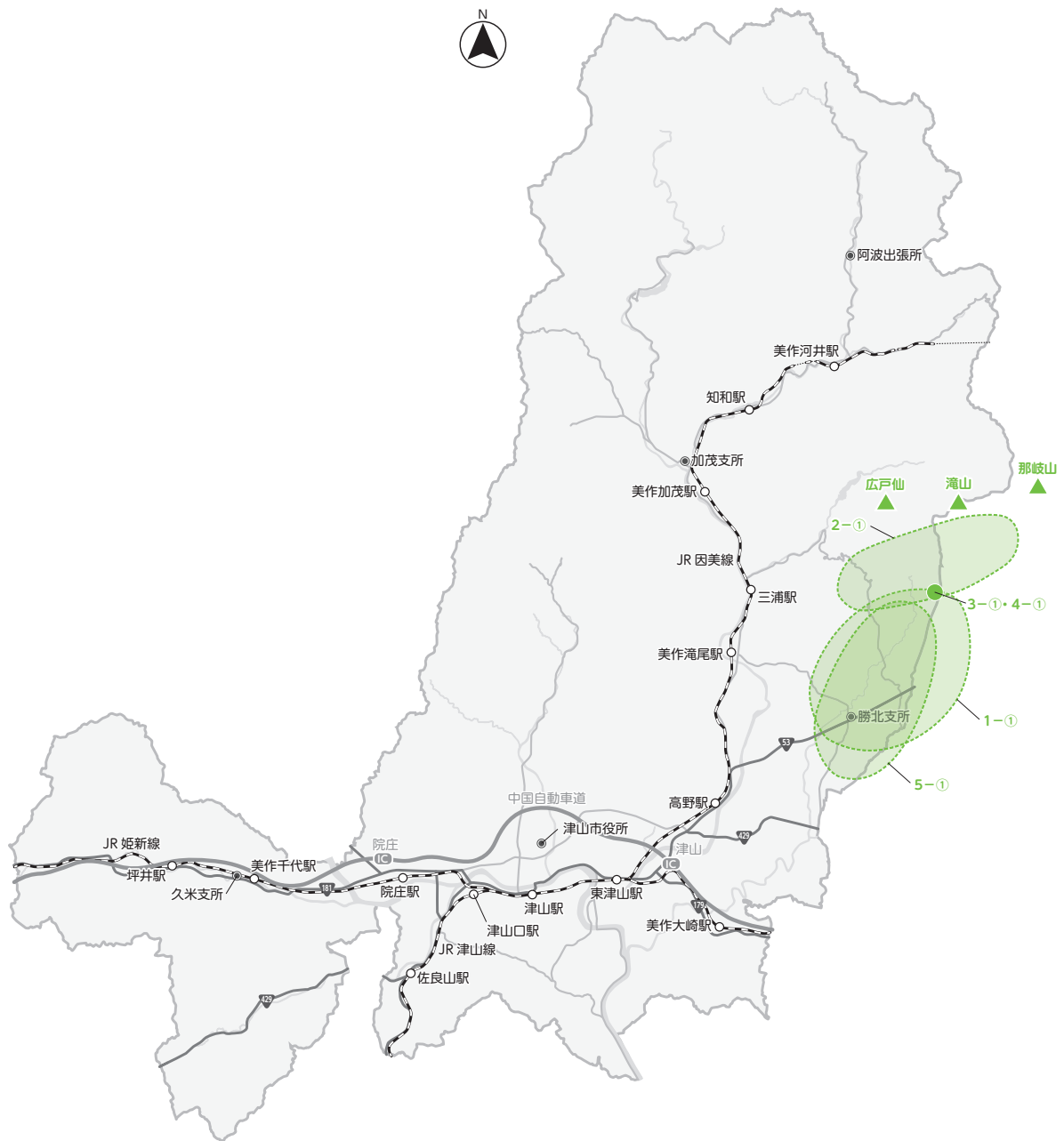
広戸風は、太平洋岸を北東や東に向かって台風が進むときに、よく発生するといわれている。昭和 28（1953）年に行われた大阪管区気象台の調査の結果、広戸風が吹くメカニズムは、次のように報告されている。

- ① 広戸風が発生するには、大気が成層構造をなし、山頂付近の上層の風速が、地面近くに比べ大きく、その風は北寄りであること。
- ② 山を越えた気流は、風下の地面に吹き降りてから、一度はねあがり、再び地面に向かって吹き降ろす。
- ③ 那岐山の風上側に北から入る谷（鳥取県 千代川）があること、風下側が広い平坦地という地形条件がある。

■災害と向き合う

この地域の人々は、広戸風によって田畑の作物を守ることはできないが、せめて住居は守りたいとのことから、防風林である「木背」を設けたり、家の高さを低くおさえ「ツシ天井に土をあげる」等の工夫を行いそれが伝えられてきた。この木背は、この地域ではごく普通に見受けられるものであり、木背の一般的な形は、母屋と納屋の北側に高さ 1 m ～ 2 m 築地を設け、その上部または前後に檜・赤松・椿・竹等を植えたものが多い。現在の国道 53 号より北の中国山地に近づくにつれ、木背を備えた家の割合が多くなるという傾向があるとの調査もある。この木

日本三大局地風 江戸風



※番号は構成文化財の写真番号

背がある風景は、広戸風が吹くこの地域独特の景観をみせており、木背が地名として残っている場所もある。ただ、近年は、木背を設けない家屋がほとんどである。

先人は、どのような天候や条件で広戸風が発生するのかを例えば、「風枕が滝水のように動いて山の麓に降りてくると、半日くらいで風が吹く」とか「大雨が降ったら風が弱い」等言い伝えや自らの体験の中で予測し、広戸風に向き合ってきた。勝北地区の北部の集落では、風枕が動きだすと、田んぼに行き、稲を南に向けて長い棒で倒しておいて、風による影響を軽減して、稲の脱粒を防ぐ等、広戸風に立ち向かい被害を軽減する知識を蓄えていった。一方で、近世以降人々は広戸風による被害届を出す等して、年貢や租税の引き下げを嘆願する等の行政的な対応も行ってきた。また、対策には費用も掛かることから俟約も行ってきた。「勝北町誌」では「風害のため大俟約」と門柱に大書した表札を掲げた家の存在を確認している（平成3（1991）年当時）。近年建築技術の進歩により、家屋倒壊等の大きな被害は減少し、耕地整理を行った結果、過去に比べ、農産物の被害も少なくなったといわれている。

勝北地区にある神社の資料には、それぞれの村に風神社が祀られていることがわかっているが時代を経るごとに合祀される等して、現在では大吉地内の風の宮、原地内の風神様、新野山形地内の風神社の3社が残る。このうち、風の宮は、ここに大風を吹き出すといわれる風穴があり、これを封じれば広戸風は吹かないであろうと、地域の人は、檜地内の加茂川の川石を運び、風穴を埋めたといわれている（「作陽誌」）。この風穴のある風の宮の森に入り石を投げると、大風が吹くとされていたため、8月中は番人を置いて監視をしていた。また毎年3月3日には、風鎮祭が行われていた。ここには今でも、元禄期に建立された風の宮の石鳥居があり、これには農民たちが風の害を除くため鳥居を寄進したことが刻まれている。

構成文化財

① 木背（こせ）



1-① 木背



1-② 木背のある風景

広戸風の吹く地域では、強風から家屋を守るために「木背」という防風林を家の背後に造っている。この屋敷林「木背」の景観は、この地域独特のものである。

2 風枕



2－① 風枕

広戸風が吹く前になると那岐山・滝山の南斜面に風枕という枕のような雲が東西に発達する。広戸風が吹く前兆であるといわれている。

3 風神をまつる神社



3－① 風神をまつる神社

かつては、それぞれの村に風神社が祀られており、風の神を鎮めるため、村をあげて祭りをを行い、風が吹かないよう祈っていた。今は、合祀される等して勝北地区内には3社が残っている。

4 風の宮鳥居



4－① 風の宮鳥居

風の宮には、石製鳥居の柱が1本だけ残っており、広戸風の被害を受けるこの地域の人が協力して、風害を防ぐためこれを寄進したことがわかるものである。

5 風の宮のお札



5－① 風の宮のお札

風の宮の風神祭でお札を持ち帰り、村境の道端に立てて、平穏を願っている。

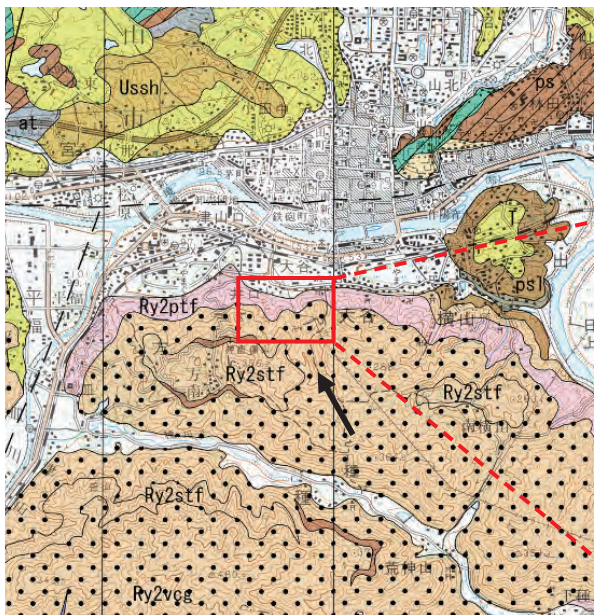
関連文化財群② 城とまちを支えた津山石

概要

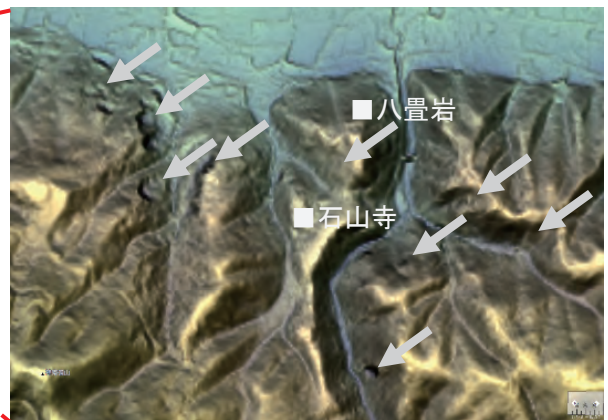
■津山城と津山石

市のシンボリック存在である現在の津山城の原型は、慶長8（1603）年にこの地に赴任してきた森忠政により造られた。現在天守等は失われているが、梯郭式の郭配置は現存しており、郭間や通路を隔てる高石垣は往時の津山城を偲ばせる存在であり、その石垣の美しさが津山城の特徴にもあげられる。津山城は、津山盆地内の丘陵に築造された平山城である。丘陵地の地質は、三郡変成帯に属する泥質片岩や緑色片岩であり、^{へきかい}劈開が発達する岩質のため石垣等に用いられることは少ない。このため石垣の築造では、津山盆地の南に連座する神南備山付近の凝灰角礫岩が主に利用された。これは、白亜紀後期（約8千万年前頃）のカルデラを作るような大規模火山活動により産したもので、神南備山付近から南の吉備高原地域では広く分布しているので石材量に困ることはない。また、火山活動の元となったマグマが石英長石質であり、これらは風化耐性に優れるほか、岩石が形成されてから長い時間を経ているため固結度が高く硬いという特徴があるので石垣の材料として適している。この凝灰岩石材が津山石である。

なお、津山石を「津山盆地南縁に位置する神南備山の東方の石山寺を含む大谷から金屋にかけて産出された凝灰岩の石材」とする。



津山盆地と神南備山付近の地質図：津山石採石の痕跡は、矢印付近の石山寺および八畳岩で確認できる。付近の地質記号（Ry2vcg）は流紋岩質凝灰角礫岩
岡山県内地質図 1/5 万（西部技術コンサルタント、2009）の「津山西部」と「津山東部」を使用



津山石採石場跡地付近の地形（カシミール スーパー地形使用）。石山寺周辺には、八畳岩の他にも採石による地形改変の跡が散見される（矢印）。

城とまちを支えた津山石



※番号は構成文化財の写真番号

■採石場でのエピソード

この津山石に関連して、津山城築城時の採石場でのエピソードがよく知られている。

慶長 13 (1608) 年 10 月 14 日、城南大谷村石山の採石場で起こった重臣三人の争いは、城普請さなかの森家にとって、思いもかけない大事件であった。時の執権であった各務四郎兵衛元峰 (当時 36 歳) は父兵庫元正以来の功績によって禄 8,000 石で家老の最上席、かつ高田城 (真庭市) 番将の職にあり、その二人の弟藤兵衛・吉左衛門もともに家老に列し、その一門の権勢は並ぶものがなかった。

この頃、城普請のために、採石場には毎日 200 人～ 300 人の人夫が働いており、藩の重臣が交替で現場の指揮に出向いていた。この日の先番の小沢彦八 (当時 37 歳) は、もと幕臣であったが、のち辞して忠政に仕え、禄 6,000 石を領して重臣となった。彦八の妻は忠政の妻名古屋氏の妹であった。かねて彦八は四郎兵衛の専権をにくみ、二人の間は決して平らかでなかった。この日彦八が岩に腰を下して杖ではじいた小石が、たまたま上ってきた後番の四郎兵衛に当たったため、四郎兵衛は立腹して無礼をとがめ、彦八も強く言い争ってついになぐり合いになった。この場に居合わせた重臣細野佐兵衛は、驚いて中に入ったが、すでに彦八は抜刀して四郎兵衛の左手を斬り落していた。左兵衛はあわてて四郎兵衛を谷間に突き落した。彦八はすかさず飛び下りて刺そうとし、かえって四郎兵衛に斬られて命を落した。この左兵衛は美濃金山以来の旧臣で 7,000 石を領していた。四郎兵衛の家臣佐藤作太夫は、左兵衛がその主人を谷間に突き落したことを大いに怒り、槍をとって左兵衛を突き殺した。四郎兵衛は急を聞いて駆けつけた弟藤兵衛や家臣らに守られて邸に帰ったが、深く恥じてその夜自刃した。

この変事が伝わると、おのおのの組士たちは、みな武装してそれぞれに参集した。高田城 (真庭市) の守備に当たっていた四郎兵衛の弟吉左衛門も、軍兵を挙げて急いで帰邸し、小沢・細野の組士もまた戦備を整えて相対した。この三氏の邸はみな城郭内の内山下にあって、付近一帯は大変な騒ぎになった。しかし家老大塚丹後の処置が適切であったため、大事に至らないで終わった。当時江戸に居た忠政は、この報を聞いて大いに怒り、三氏の家を取り潰した。このエピソードからは、石切り場は重臣が担当すべき場所であったことがわかり、築城、あるいは城下町建設にあたり石材の産出が重要視されていたことが知られる。

ちなみに、津山城内では石垣には津山石が使用されているが、城内の暗渠排水、あるいは雨落ちの開渠の排水路については、より加工の容易な「^{てしまいし}豊島石」の U 字溝が使用されている。この U 字溝は柔らかいと同時に脆く、非常に破損しやすいのであるが、商品として流通していたらしく、岡山城と津山城で全く同一の規格で作成された U 字溝が出土している。

■城下町の津山石

津山石の利用は津山城の石垣に止まらない。城と城下町を仕切る堀の石垣、武家屋敷の土塀や土蔵の基礎、街路の両側溝の石組み、町家の背後溝など、城下町のありとあらゆるインフラ整備に津山石は使われており、津山城下町の建設と津山石とは密接不可分な関係と言える。

具体的には、城東地区には旧出雲街道の宿場町の建造物群が残されているが、これらの建物の基礎や水路の護岸、小石垣等に津山石は使われている。また、津山城の西、田町の武家屋敷の水路脇の腰石垣や、武家地街路の側溝石垣等にも津山石が現存している。津山城の築城と城下町の整備にあたり、津山石は無くてはならない石材であり、広く利用されていたことは、現在の城下町景観の中にも確実に継承されている。

そして現在では津山石の採石場はなくなっているが、江戸時代に産出され、城下町で使用され、近年の開発によって不要となった津山石が、現在でも住宅の庭石等に再利用されている。

■津山石の採取

津山石は、神南備山の東北東の大谷地区の山で採取された。元の採石場の跡には現在、石山寺が建立されており、その境内で津山石を切り出していた当時の矢穴跡などが確認できる。また、石山寺の縁起を記した文章でも津山城築城の折から石材を切り出していた場所であることが記載されている。石山寺の北東約 200m のところにある“八畳岩”も旧採石場であり、こちらでも矢穴跡や岩盤を切り出した痕跡を認めることができる。さらに地形図を見ると、人工的に斜面を切り出したような痕跡を認めることができるが、採石場跡地であったかについては、今後の調査を待つ必要がある。いずれの採石場も津山盆地から山地へと地形が急変する場所のため、切り出した石材を山から直接盆地に落とすことができる場所であることや、石の消費地である津山城や城下町まで約 1 km しか離れておらず、原石山として好立地を備えた場所であった。現在は津山石としての採石は行われていないが、津山城築城 400 年を記念して平成 16 (2004) 年に大谷地区に残っていた大石を津山城まで運ぶ「津山歴史時代絵巻～築城大石曳き～」が行われた。津山城やそれにかかわる津山の人々の歴史を後世に伝えていくために、「津山石」を文化財として伝承していくことは重要である。

構成文化財

① 津山城



1-① 津山城の石垣

白っぽい色調の石（石英長石質の火成岩の特徴）が多い。（城郭（石垣））



1-② 津山城の石垣の石(近接写真)

白色の基質中に最大数 cm の大きさの火山岩質の岩片や 2 mm 前後の石英粒子（破片）などが混入している。（城郭（石垣））

② 忘れさられた石



2-① 忘れ去られた石

津山城内に置かれ津山石の原石。大谷地区で発見され、築城 400 年のイベントとして津山城まで運ばれた。（津山石の残石）

③ 石山寺



3-① 石山寺境内の採石場跡

矢穴跡の列が見られる。（採石場跡）



3-② 石切場跡の標柱

石山寺境内に設置された石切場跡の標柱（採石場跡）

4 八畳岩



4－① 八畳岩から津山城方面

津山盆地の南縁の山地であり採石場の立地として優れる。(採石場跡)



4－② 八畳岩に見られる採石跡

矢穴跡の列が見られる。(採石場跡)

5 城東地区の民家の基礎石垣



5－① 城東地区の民家の基礎石垣

城東伝統的建造物群保存地区内の民家の基礎の石垣（石垣）

6 田町の民家の石垣



6－① 田町の民家の石垣

田町の民家の石垣（石垣）

7 田町の武家屋敷の石垣



7－① 田町の武家屋敷の石垣

田町の武家屋敷の小石垣（石垣）

関連文化財群③ 中国山地の製鉄所 鉄の遺構群

概要

鉄は人々の生活に欠かすことのできないものであることは言うまでもない。

市街地北部の加茂地域ではその鉄とかかわりのある地形が各所に残っている。古代から近世にかけて砂鉄が採集された跡である。この地域の人々の生活は製鉄と切り離すことのできない環境の上に成り立っている。

ストーリー

中国山地の広い範囲に分布する古第三系の山陰花崗岩は、副成分鉱物として磁鉄鉱を多く含み、磁鉄鉱系列の花崗岩として記載される (Ishihara, 1980)。この磁鉄鉱は風化した花崗岩体を切り崩して選鉱することで容易に濃集させることができるので、山陰側・山陽側を問わず中国山地の一帯で砂鉄採集（鉄穴流し）が行われてきた。

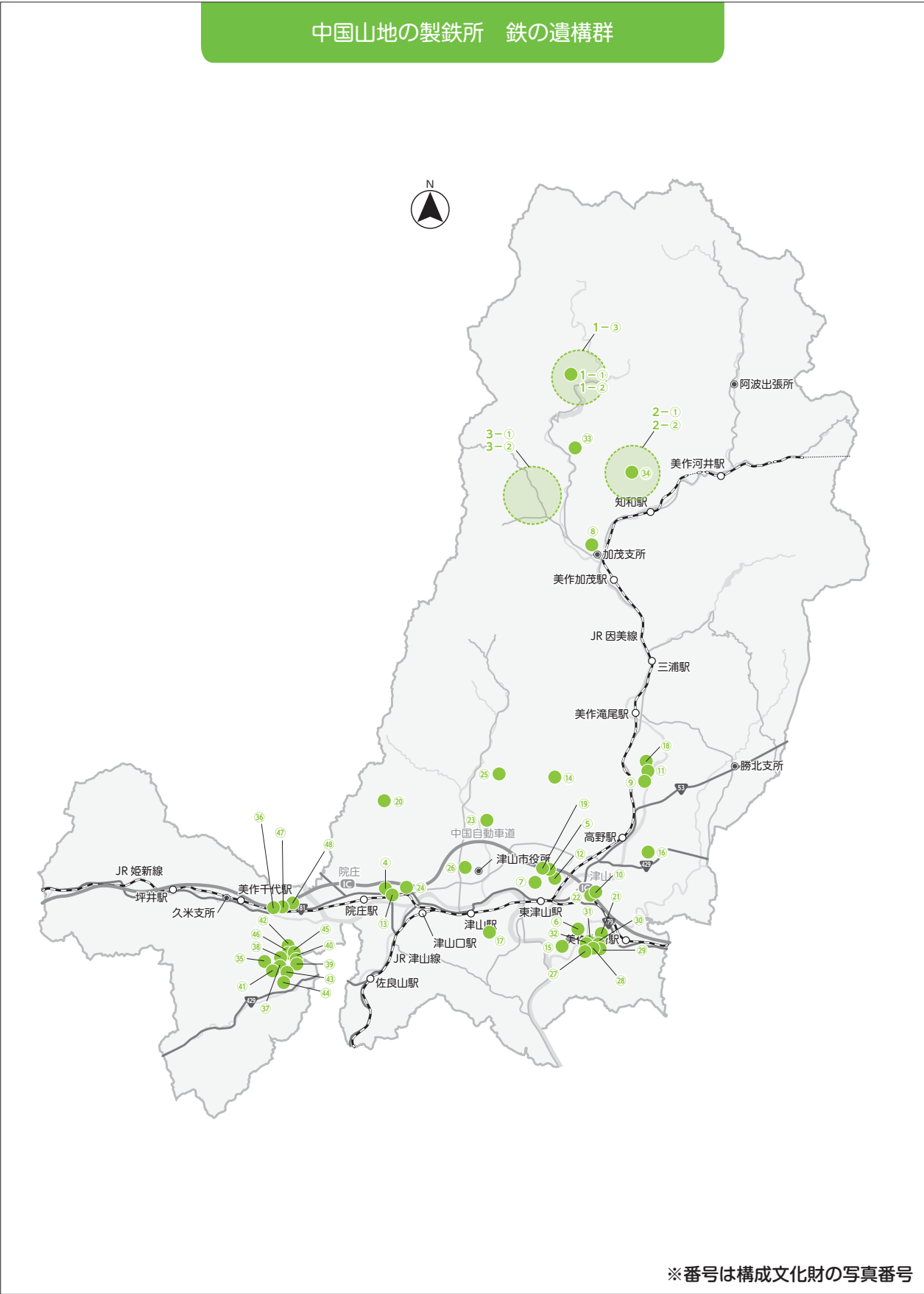
採集された砂鉄は、現地で製鉄を行なうことで粗鋼化されたが、製鉄を行なうためには炭（木炭）が必要であり、これも中国山地の山林から容易に調達できる状況であった。古代から近世にかけての日本の製鉄は炉の中に砂鉄と木炭を投入して高温の状態で鉄を作り出す「タタラ吹製鉄法（通称「タタラ」）」で行われていた。

4世紀末から5世紀にかけての古墳から鉄滓（タタラ製鉄に伴い排出される残滓）が確認されていることから、津山地域における鉄（タタラ）の歴史は古い。津山市内では6世紀後半に遡る、発見時としては日本最古の製鉄遺跡である大蔵池南遺跡が久米地域で発見され、加茂地域に近い草加部地域の緑山遺跡では、製鉄に使用する炭を作ったと推定される「横口付き窯（通称「ヤツメウナギ」）」が密集して発見されるなど、日本最古の製鉄地域の一つであることが考古学的に証明されている。また、5世紀半ば以降の小古墳には鉄滓が伴うものが多数あり、津山地域の集団の長は鉄・鉄器生産に何らかの形でかかわっていたものがいたことも推定される。

また、西吉田北1号墳、長畝山2号墳からは鉄鉋^{かなはし}や金槌^{てったく}という鍛冶道具が出土しており、製鉄開始前には、鉄器を加工する集団も存在していたことが判明している。特に、西吉田北1号墳からは朝鮮半島から渡ってきたと思われる鉄鐸^{てったく}も出土しており、これら鉄器生産のルーツが朝鮮半島にあることを暗示している。

津山市及びその周辺地域では古代・中世を通してタタラ製鉄は隆興し、江戸時代以降には「山内」と呼ばれる製鉄に関わる職人たちが集住する集落が形成され、タタラ製鉄は最盛期を迎えた。それに伴い、砂鉄の採集のため山を崩すことにより、川が濁るなどの状況が発生し、中流域の

中国山地の製鉄所 鉄の遺構群



※番号は構成文化財の写真番号

津山藩や下流域の岡山藩から苦情が出るような、鉄生産に伴う負の側面が顕在化したことも知られている。

このような、中国山地の自然を背景とした砂鉄の採集、炭の調達から、製鉄に至る一連の産業文化遺構を鉄（タタラ）の遺構群と呼ぶ。

砂鉄や粗鋼などの中国山地から産物は、一旦津山に集められ、吉井川を通じて高瀬舟で瀬戸内海まで運搬され、備前地方の刀剣製作等下流の鉄製品産業の発展を支えた。津山の発展は間接的ではあるが、鉄（タタラ）によって支えられてきたと言っても過言ではない。

鉄（タタラ）の文化は津山市域においては現在途絶えているが、鉄穴流しのために改変された地形は各所に残存し、その一部には製鉄を行った炉跡や鉱滓も残存する。また、鉄穴流しによってできた緩斜面や、切り崩した土砂が堆積した谷地の平地は農地として現在でも利用されている。さらに、沈砂池とされた場所には湿地が形成され、特異な植生も生じている等、津山の鉄（タタラ）の遺跡群は、産業遺産、文化遺産、自然遺産としての価値が高い。

構成文化財

1 桑谷タタラ遺跡



1-① 桑谷タタラ遺跡の鉄滓

桑谷タタラ遺跡の地表面の鉄滓（加茂町黒木）（鉄穴流し跡、製錬炉跡）



1-② 桑谷タタラ遺跡付近の林道
切端に現れた炉跡

地表面近くの土に焼土が見られ周囲に鉄滓が散乱している。（鉄穴流し跡、製錬炉跡）



1-③ 桑谷タタラ遺跡付近の地形モデル：砂鉄の採取により尾根がなくなっている様子が明瞭である。(矢印) (鉄穴流し跡、製錬炉跡)

② 青柳の改変地形群



2-① 白金山

かつて“青柳の崩れ山”と呼ばれていた砂鉄採取地（加茂町青柳）（鉄穴流し跡）



2-② 加茂町青柳地区の緩斜面地形

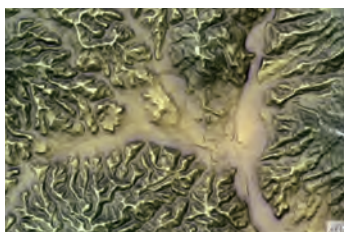
砂鉄採取によって尾根を切り取ったり、堆砂によって平坦化した地形（鉄穴流し跡）

③ 宇野の改変地形群



3-① 鉄穴流し跡の残丘

砂鉄採取に取り残された残丘と改変地の農地（加茂町宇野）（鉄穴流し跡）



3-② 加茂町宇野地区の改変地形

中央部付近に残丘、溝状地形、尾根の切り取りが確認できる（鉄穴流し跡）

鉄穴流し跡等の改変地形の他に、炉跡や鍛冶に関する信仰の形跡（金屋子神）等も確認されているが、現時点では未整理のものが多く、調査の進行により順次文化財として追加する必要がある。

以下は鉄滓等が出土した古墳などの遺構

④～は「作州のみち2（上・下） 津山朝日新聞社（平成8年）」より引用。

番号	文化財の名称	類 型
④	美和山古墳群	鉄滓出土
⑤	押入西1号墳	製錬鍛冶滓
⑥	長畝山2号墳	鉄滓、鉄片、鍛冶道具
⑦	六つ塚1・3・5号墳	鉄滓、鍛錬鍛冶滓
⑧	万燈山古墳	鉄滓、鉄製品
⑨	草加部東蔵坊遺跡	砂鉄製錬滓、鉄滓
⑩	天神原1号墳	砂鉄製錬滓
⑪	鮎込2号墳	砂鉄製錬滓
⑫	狐塚遺跡	砂鉄製錬滓、鉄塊、鍛錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶炉
⑬	二宮遺跡	鍛冶滓、製錬滓、鉄滓
⑭	ビシャゴ谷遺跡	砂鉄製錬滓
⑮	三太夫林古墳群	鉄滓
⑯	河面丸山古墳	鉄滓
⑰	横山明見峪1号墳	鉄滓
⑱	緑山遺跡	砂鉄製錬滓
⑲	押入西遺跡	砂鉄製錬滓、鉄滓
⑳	アモウラ遺跡	鉄滓
㉑	一貫西遺跡	鉄滓、鍛冶炉、砂鉄製錬滓
㉒	天神原遺跡	鉄滓、鍛冶炉
㉓	大田十二社遺跡	鍛冶炉、鉄滓
㉔	二宮大成（大東）遺跡	鉄滓
㉕	紫保井遺跡	鉄滓
㉖	高橋谷遺跡	鉄滓
㉗	大畑1号墳	鉄滓、鉄塊
㉘	クズレ塚古墳	鉄滓
㉙	深田河内遺跡	炉底滓、鉄滓
㉚	別所谷遺跡	鉄滓
㉛	大畑遺跡	鉄滓
㉜	小原遺跡	鉄滓
㉝	キナザコ遺跡	炉跡
㉞	青柳神社	金屋子神
㉟	大蔵池南製鉄遺跡	鍛冶炉、砂鉄製錬滓
㊱	領家遺跡	炉、羽口、鉄滓
㊲	芦ヶ谷古墳	砂鉄製錬滓
㊳	高岩1号墳	砂鉄製錬滓
㊴	コウデン2号墳	製錬滓
㊵	コウデン8号墳	鉄滓
㊶	荒神西古墳	製錬滓
㊷	大沢2号墳	砂鉄製錬滓
㊸	落山古墳	砂鉄製錬滓
㊹	釜田1号墳	砂鉄製錬滓
㊺	稼山4号墳	鍛冶滓
㊻	稼山6号墳	砂鉄製錬滓
㊼	久米廃寺	鉄滓
㊽	宮尾遺跡	鍛冶炉、鉄滓、羽口、木炭片
㊾	加茂町製鉄関連遺跡群（32か所）	
㊿	黒木地区鉄滓散布遺跡群（113か所）	
㊿	阿波のタタラ遺跡群	鉄穴流し跡、金屋子神等



・鉄滓分布地
×金屋子神社所在地

鉄滓分布図（加茂地域）

【出典】加茂の鉄滓分布図（加茂町史：加茂町、昭和51年 p351 を一部改変）

関連文化財群④ 地域のよりどころ むらのまつり

概要

春は田植えの季節であり、農作業の始まりである。御田植祭が行われ五穀豊穡を祈願する。夏には、各地域で虫送りや風除けの行事が行われているところがある、秋には豊作を感謝して祭りが行われ、農閑期である冬にも盗難除けやマムシ除けの祭りが行われている。

このように、年間を通じて特に主な生業である農業に関する祭りが、地域で行われてきた。これらの祭りの一部は今に伝わり、自然に寄り添いながら生きてきた人々の営みを垣間見ることが出来る。

ストーリー

春の田植えの時期に、中山神社では御田植神事が執り行われ、笛や太鼓に合わせて雌雄の獅子が舞い、20人ほどの鍬人が祭具用の木鍬を振って田を打ち返す様子を演じ、五穀豊穡を祈る。起源については定かではないが、鎌倉時代から続いているといわれており、津山藩の町奉行日記にも神事の様子が記載されている。

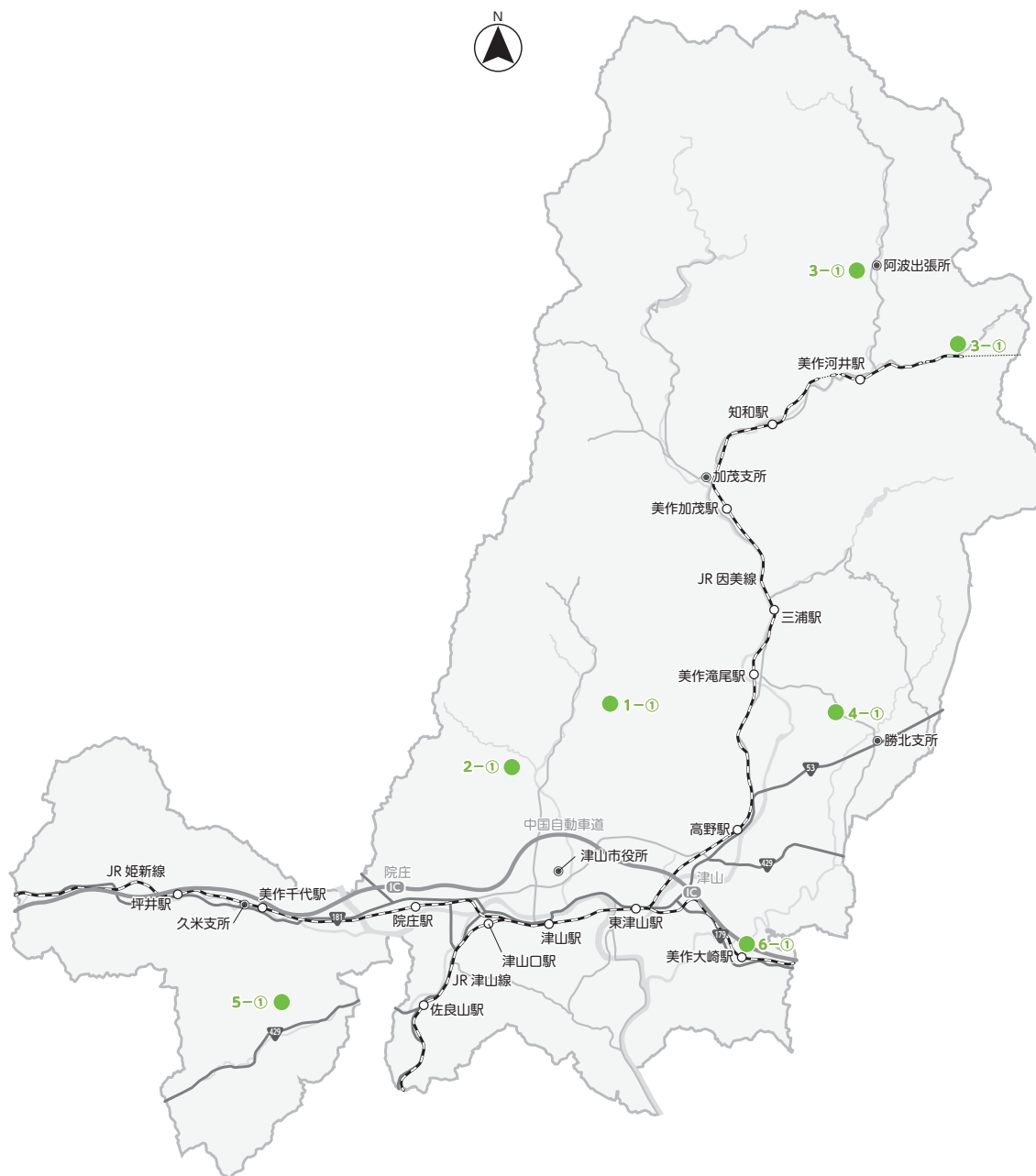
五穀豊穡を感謝して行われる秋祭りは、今でも多くの集落で行われており、祭りの準備から当日にかけて、地域がにぎやかな雰囲気包まれる。

高田神社の秋祭りで行われる獅子舞は、獅子株と呼ばれる2人の指揮者の指図により雌雄獅子が笛と太鼓に合わせて舞を繰り広げる。各獅子には青年が各12人ずつ入り、向伴奏は、横笛8人と胴丸太鼓4人で行う。最後は、拝殿に突進（練りこみ）して舞を終える。このような大人数で行われる祭りは他にはなく、岡山県の重要無形文化財に指定されている。

阿波地区で行われる阿波八幡神社の花祭りと、阿波地区に隣接する加茂町物見の物見の花まつりは、ともに岡山県の重要無形民俗文化財に指定されている祭りである。この祭りには、氏子の各地区がそれぞれ趣向を凝らして、竹・木・色紙等を使って製作した傘型の造花によるダシを作成し奉納する。造花には、梅・桜・しだれ柳の3種でいずれも春の花である。御神幸に色彩を添えるため、各地区の若者がこの造花をもって先駆を練り歩き、相手の造花を壊しあう勇壮な行事である。起源はよくわかっていないが、五穀豊穡、家内安全を祈り感謝する祭りである。

新野まつりは、八幡神社を親神様として、地区の5社、旧6村の氏子たちが、神輿をかつぎ稲塚野の神事場に集まり、神輿を神座に安置する祭りで、岡山県の重要無形民俗文化財に指定されている。祭場では、式典、直会、鍬振りが行われたのち、神輿の練が繰り返される美作地

地域のよりどころ むらのまつり



※番号は構成文化財の写真番号

方最大の祭りといわれている。祭りの詳細な起源はよくわかっていないが、今日のような姿になったのは、室町期であると推定されている。

農作業の終わった地域では、先輩に獅子舞の練習を見てもらう若者の姿や浦安の舞の練習に励む子供たち、それらを見守る地域の人の姿等、祭り前の各地域には、独特の和やかな雰囲気を感じられる。祭りの当日は、各神社や参道に幟や提灯が立ち並び、地域の人々はもちろんのこと、地域を離れて生活をしている人々も帰ってきて、にぎやかな雰囲気の中で祭りは行われる。

冬の農閑期にも祭りは行われる。

貴布弥神社の境内にある社のうち奥御前神社は「狼様」と呼ばれ、盗難悪疫除けの神として人々の信仰を集めている。貴布弥神社では、霜月大祭のとき狼様の神事が行われる。社殿前の石灯籠に「天保 13 (1842) 年西々条郡東神戸村小沢武右衛門」とあり、江戸時代後半には遠方からも信仰を集めていたようである。今でも貴布弥神社と言って分からない人も、狼様と言えば分るほど地元の生活に溶け込んでおり、霜月大祭のときは多くの参拝者が集まる。

旧暦の元日から3日にかけて行われる福力荒神社大祭は、特にマムシ除けとして有名であり、多くの露店が立ち並び約 10 万人の人達が参拝しているといわれるほど、にぎやかな祭りである。

このように神社とそこで行われる祭りは、その時の社会情勢に柔軟に対応して継承されてきた。そのため今でも地域コミュニティの核としての役割を維持している。今回取り上げた祭り以外にも多様な地域の祭りが行われており、それらを取りまく人々の営みや景観も含めて守るべき、津山の歴史文化である。

構成文化財

① 高田神社の獅子舞



1-① 高田神社の獅子舞

毎年 10 月第 2 日曜日に行われる高田神社の秋祭りにおいて舞われている。高田神社は、大正 2 (1913) 年近郊五社が合併したもので、元は久保神社にて行われていた。雌雄の獅子に青年が各 12 人ずつ入り、向かい合って闘争する勇壮な舞である。伴奏は、横笛 8 人と胴丸太鼓 4 人で行う。

2 中山神社の御田植神事



2-① 中山神社の御田植神事

神事は笛や太鼓に合わせて雌雄の獅子が舞い、20人ほどの鍬人が祭具用の木鍬を振って田を打ち返す様子を演じ、五穀豊穡を祈る。起源については定かではないが、鎌倉時代から続いているといわれており、津山藩の町奉行日記にも神事の様子が記載されている。

③ 八幡神社及び物見神社の花祭り



3-① 八幡神社の花祭り

八幡神社は、11月3日、物見神社は、10月25日以前の日曜日に若い衆が花を持って歩き、御神幸に色彩を添える。この花は、各地区が造花（竹・木・色紙により製作した傘形の一種のダシ）で作り、梅・桜・しだれ柳の3種でいずれも春の花である。創始の時代は、不詳であるが、社殿（再建延宝6（1678）年）の建立の頃とされている。由来は、家内安全、五穀豊穡を氏神様に祈願感謝する行事である。

④ 新野まつり



4-① 新野まつり

新野まつりは、新野山形の八幡宮を親神様として二松・天穂日・天剣・天満神社の氏子たちが神輿を担ぎ、毎年11月3日に稲塚野の神事場に集まって豊穰の秋の祝い、新野郷すべての人々が喜びを確かめあい励ましあう一郷一所の大祭である。各神社の社伝は古く伝承行事もさまざまであるが、祭りの形態が今日のように郷土団結の様子を整えてきたのはおよそ室町期の頃であると推定されている。

5 貴布弥神社の霜月大祭



5-① 奥御前神社

毎年12月13日～15日の3日間「霜月大祭」が行われる。境内にある社のうち、奥御前神社は「狼様」と呼ばれ、盗難悪疫除けの神様として広く信仰を集める。ここで狼様の神事が行われ、多くの参拝者でにぎわう。

⑥ 福力荒神社大祭



6-① 福力荒神社

旧暦1月1日～3日の大祭に参詣すれば家族が1年間マムシの被害に遭わないといわれており、期間中は農協関係の屋台も出る等多くの屋台が立ち並び、大勢の参拝客でにぎわう。

関連文化財群⑤ 法然ゆかりの立石家

概要

法然上人の出自である漆間氏の本家である立石家は古代に九州の宇佐から美作へ移り住み、代々美作国二宮である高野神社の宮司として二宮の地に住み続けている。戦国時代には居住地背後の美和山1号墳を改変して美和山城を築き、詰めの城とした。江戸時代には宮司・大庄屋として地域に貢献し、近代には実業家として自宅敷地内に鉄道を敷設する等、津山地区の近代化に大きく貢献した。

ストーリー

■立石家の由来

元は漆間氏。豊前宇佐神宮の神官漆間元邦が延喜年間（901～920）美作に押領使（大野庄、神戸庄、稲岡庄）として移住し「神戸大夫」と称した。

元邦の長男盛国が立石家を継承し、二男盛栄が漆間家を世襲した。その後、漆間盛栄から五代を経た時国の子「勢至丸」が、9歳にして僧となり源空と名を改めた。彼が後の浄土宗開祖「法然」となる。

立石氏は美作国二宮である高野神社祠官となり、戦国時代には自宅の裏の前方後円墳を利用して、美和山城を築き、詰めの城とした。

立石家は、平安、鎌倉、室町時代を通じ、美作国二宮高野神社の社司を継承する一方、美和山城を本拠にして、武力集団を率いて領土を守る地頭として存在していた。高野神社は美作地方の鎮守であると同時に、立石一族の氏神でもあり、法然の生誕地誕生寺の寺紋も高野神社の社紋も二宮立石家の家紋もみな同じである。

■大庄屋として

慶長8（1603）年に森忠政が津山城主として入封すると、帰農して大庄屋となった。続く松平家の下でも、二宮立石家は引き続き大庄屋職に任じられた。森家も松平家も在地で古くからの勢力である立石家をうまく利用した。

■立石家と自由民権運動

幕末から明治時代のはじめにかけては、開国の影響と新政府による近代化への改革で、世の中が大きく変わりつつあった。そのころ美作で近代産業を発展させようと立ち上がったのは、

豪農といわれる人たちであり、明治11(1878)年、立石岐、中島衛、内田饒穂、安黒基たちが、養蚕・製糸業をすすめようと「共之社」を結成した。さらに彼らは、岡山県議会創設に際し、県会議員に当選、明治14(1881)年、美作自由党を組織する。板垣退助の自由党と連携して国会開設の機運を造成した。

彼らの運動は「豪農民権」といわれているが、その中心となって活躍したのは、立石岐であった。岐は、国会が開設されると、最初の議員となり、その後も明治29(1896)年、中国鉄道株式会社取締役として鉄道の岡山津山間建設に取り組み、明治31(1898)年に開通させた。また明治32(1899)年、竹内文による「津山女学校」開校に際して、設立や運営に協力し、さらに二宮小学校の建設に際して、私有地を提供した。

晩年は、万人への愛を説き、森本慶三たちとキリスト教の伝導に努めた。そもそも立石家は浄土宗宗祖・法然上人ゆかりの家系といわれ、岐がキリスト教へ改宗することは親戚から強い反対を受けたが、岐は「むしろ自分の改宗は、他力本願を説く法然の志を継ぐものである」と述べたといわれている。

構成文化財

1 立石家住宅



1-① 立石家住宅

平安時代から二宮高野神社の社司を勤めてきた家柄である。戦国時代は古墳群のある美和山に城を構え、武士団を率いる地位にあった。森忠政が津山に入封した以後(慶長8年)は、帰農して現在の地に居を定めた。その立地は吉井川の支流と本流との間に横たわる低い丘陵地であり、その頂には美和山古墳群がある。その緩い斜面を、高野神社の参道に直交する形で、坂道が北へ延び、その先に立石家の館がある。後に山を控え、前に主要街道の通る眺望のよい岡の上に、堀や土塁を巡らして、中に居館を設けるのが、中世名主層の通例と云われており、立石家住宅の配置はまさにその典型であると言える。

2 高野神社



2-① 高野神社

安閑天皇2(535)年の鎮座と伝えられる延喜式内社。美作国二宮として地元の尊崇厚く、社伝によると源頼朝は神門を建立し、山名氏は社殿の修造、神馬の奉獻、毛利元就及び小早川隆景は祭祀厳修を令し、社殿を修造したという。

国主森氏は代々深く崇敬の誠を尽くして社領80石を献じ、寛文3(1663)年2代藩主長継は現社殿を造営。松平氏もまた年々祭資を供進した。

③ 美和山城跡（史跡美和山古墳群）



3－① 美和山城跡（美和山1号墳）

美作地方最大の前方後円墳を含む古墳群。北から1号墳（胴塚）（前方後円墳、全長 80m）、2号墳（蛇塚）（円墳、直径 34m）、3号墳（耳塚）（円墳、直径 37m）と確認調査で発見された6号墳（円墳、直径 16m）の4基の古墳で構成され、地元では「伝説」にもとづいて、それぞれ胴塚、蛇塚、耳塚と呼ばれならわしている。1、2、3号墳とも墳丘斜面を直径 30cm 程の葺石で覆い、円筒埴輪や器財型埴輪が用いられているが、埋葬施設等はいずれも未発掘で不明である。古墳の大きさや埴輪等から、1、2、3号墳は、古墳時代前半期（4～5世紀）にこの地域で勢力をのばした豪族の墓であると考えられる。また、戦国時代（15～16世紀）この地に美和山城が築かれていたことが文献に記されており、1号墳の東西の張り出しはその美和山城の土塁の跡とみられる。

④ グンゼ工場



4－① グンゼ工場

大正5（1916）年、二宮に「郡是蚕糸・津山分工場」として設立された工場。木造二階建ての本館及びノコギリ屋根の工場棟が残る。

関連文化財群⑥ ここが違う中山造（神社建築の世界）

概要

美作国一宮の中山神社は、尼子晴久により建設された「中山造」と呼ばれる独特の建築様式を持っている。「方三間、入母屋造、妻入、唐破風の向拝」という外観で特徴づけられ、美作を中心に分布している。中山神社以外は江戸時代前半に主として藩主森長継により建設されており、津山市周辺の神社建築の特徴となっている。

ストーリー

■中山造の源流

現在の中山神社本殿は尼子晴久によって再建されたものである。棟札写しに記す頭領の「中尾藤右衛門藤原朝臣真次」は「伯州住」とあり、その所在はあきらかである。当時尼子氏は出雲の富田城を拠点にして山陰から美作にかけて広く制圧しており、大工棟梁を山陰伯耆から呼び寄せたものと思われる。

そしてこの時採用された「入母屋造妻入」の本殿形式が、のちの森藩の時代になって建造されることになる大社の基範として常に生き続けることになるのである。津山地方ではこの形式を中山神社に代表させて「中山造」と称している。入母屋造妻入本殿は他地方にもみられるが、津山を中心とする美作一円に分布し、しかも中山神社本殿がその一番古い遺構であることは注意される。

この形式の起源であるが、「切妻造妻入」の本殿を持つ出雲大社から一定の距離をもった地域ですでに純粋な大社造から発展変化した入母屋造妻入の社殿があつて、それが美作侵攻の意欲横溢した尼子氏によって新たにもたらされたものと推定されている。

中山造本殿遺構一覧表

名称	所在地	建立年代	西暦	根拠	規模	向拝	組物	指定
岡山県								
中山神社本殿	津山市	永禄2年	1559	古記	三間社	向唐破風	出三斗	重文
総社本殿	津山市	明暦3年	1657	棟札	三間社	向唐破風	出三斗	重文
高野神社本殿	津山市	寛文3年	1663	棟札	三間社	向唐破風	出組	県指定
徳守神社本殿	津山市	寛文4年	1664	棟札	三間社	向唐破風	二手先象鼻尾垂木	県指定
一宮神社本殿	真庭市	寛文6年	1666	棟札	一軒社	向唐破風	出組	
鶴山八幡神社本殿	津山市	寛文9年	1669	棟札	三間社	向唐破瓜	三手先象鼻尾垂木	重文
総社宮本殿	吉備中央町	寛文9年	1669	社伝	三間社	縫向拝	出組	町指定
高田神社本殿	真庭市	寛文11年	1671	棟札	三間社	向唐破風	二手先象鼻尾垂木	市指定

ここが違う中山造（神社建築の世界）



※番号は構成文化財の写真番号

名称	所在地	建立年代	西暦	根拠	規模	向拝	組物	指定
日吉神社本殿	吉備中央町	延宝4年	1676	社伝	三間社	縫向拝	出組	町指定
春日神社本殿	真庭市	延宝7年	1679	棟札	三間社	向唐破風	出組	
化気神社本殿	吉備中央町	延享4年	1747	社伝	三間社	向唐破風	出組	町指定
塚角神社本殿	美咲町	宝暦5年	1755	棟札	三間社	縫、軒唐破風	出組	
御崎神社本殿	真庭市	18世紀中			一軒社	向唐破風	出三斗	
田神社本殿	津山市	18世紀中			三間社	向唐破風	出組	
吉田神社本殿	津山市	18世紀中			一軒社	縫向拝	出組	
志呂神社本殿	岡山市北区	嘉永元年	1848	棟札	三間社	向唐破風	三手先和様尾垂木	
古大隅神社本殿	津山市	明治			一軒社	軒唐破風	二手先	
島根県								
柿本神社本殿	益田市	正徳2年	1712	棟札	三間社	向唐破風	出組	
弥栄神社本殿	津和野町	江戸後期			一軒社	縫破風	三斗	
諏訪神社本殿	邑南町	嘉永7年	1854	棟札	一軒社	軒唐破風	三斗	
市木神社本殿	浜田市	昭和3年	1928		一軒社	軒唐破風	舟肘木	
鳥取県								
神奈川神社本殿	江府町	元禄14年	1701	棟札	一軒社	軒唐破風	二手先	
野坂神社旧本殿	鳥取市	安永9年	1780	棟札	一軒社	軒唐破風	出組	
西楽楽神社本殿	日南町	文化12年	1815	棟札	三間社	軒唐破風	二手先	
賀茂神社本殿	倉吉市	19世紀中			一軒社	縫破風	出組	
樋口神社本殿	大山町	明治32年	1899	棟札	一軒社	軒唐破風	二手先	

■美作地域の中山造系本殿

津山市内の神社本殿は妻入系がその主流であるが、その中にあるのは、正面入母屋背面切妻とするものが圧倒的に多く、全体の約7割を占める。これらはすべて一間社で、必然的に小規模なものとなるが、それだけに造営費用の点からいっても比較的造りやすく、普遍したものと思われる。背面まで入母屋造の中山造に対して、背面切妻造のものを「中山造系」と呼ぶ。

現存する中山造系の建物で一番古いと考えられるものは、17世紀初めから中頃にかけての徳守神社境内社住吉神社本殿と八出神社本殿で、これに同世紀末の千代稻荷神社本殿や地蔵院愛宕堂が加わる。地蔵院は正面柱間が10尺あってやや大きいのが、前3棟はともに8尺間で、正面の庇が縫破風であること、縫破風の位置が隅から2番垂木の位置にあること、組物は蛇腹支輪付の出組であること、背面側の妻飾りが虹梁太瓶束式であること、など多くの共通点があり、一つの規格がそこに介在していたようである。

ところが、18世紀に入るとそれらがかなり崩れてきて、平面の規模も大小が混在するようになるし、組物の形式も簡単な三斗組のものから二手先、三手先に及ぶものまで種々のものが発生し、非常に多彩となり、それが順次時代が降るにしたがい多用するようになる彫刻類と相まって、装飾偏重指向へと流れて行く。

その他外観上の変化として顕著なのは底部分の扱いで、鎚破風形式は一部伝承されるものの、そのほとんどは向唐破風や軒唐破風として、正面側をより賑やかにしようとする傾向が加わることである。もっとも底を唐破風にすることは、いわゆる中山造では中山神社や総社にもみられるから、大型社殿ではすでに中世からもちいられていたことがわかるが、それが18世紀になって一間社のしかも背面を切妻造とするこの種の本殿にも準用されるようになる事実は、社殿造営の計画段階にあって、中山神社本殿をはじめとする正規の造りになる三間社入母屋妻入社殿（いわゆる中山造）が常に理想形として念頭にあったものと考えられる。

構成文化財

① 重要文化財 中山神社



1-① 中山神社

中山神社は、『日本三代実録』貞観2(860)年正月戊寅条に「美作国正五位下中山神に従四位下を授く」とあるのが史料上の初見であり、同6(864)年8月官社に列せられ、同17(875)年4月には正三位に昇叙された(以上、同書)。

『延喜式』神名下に「苦東郡中山神社〈名神大〉」とあり、『今昔物語』にも「今昔、美作國二中参・高野ト申神在マス。其神ノ体八、中参八猿、高野八蛇ニテゾ在マシケル」とある。

『作陽誌』によると、戦国時代の天文末年出雲から進入してきた尼子晴久は、中山神社に拠って抵抗する苦田郡の国人らを制圧するため、本殿以下に火を放った。その後晴久は永禄2(1559)年社殿を再興した。

現本殿は尼子晴久によって建立されたもので正面3間、側面3間の正方形(方10.45m)で、単層入母屋造妻入、1間の向唐破風造の向拝を付す。屋根は桧皮葺で大棟には千木と5本の堅男木をのせている。妻飾りは虹梁大瓶束式、軒は二軒繁垂木である。柱はケヤキの総円柱。組物は出三斗で斗供間の中備には彩色彫刻で飾った^{かえるまた}墓股を入れている。腰廻りの四周には擬宝珠高欄の付いた縁をめぐらし、その縁の組物は三斗で斗供間にも墓股を用いている。

② 重要文化財 総社本殿



2-① 総社本殿

社誌によれば、その祭神は大己貴命である。そして左相殿には中山大神宮鏡造命を祭り、右相殿には高野大明神鵜茅葺不合命を祭る。さらに、左側の内宮には美作東半国の諸社、右側の内宮には西半国の諸社を祭るという。

社伝によれば、鎮座は古く欽明天皇の25(564)年と伝える。本殿は、永禄5(1562)年に毛利元就が再建したものと伝えるが、総社に残る棟札では、最も古いものは元和8(1622)年に森忠政が「正一位惣社大明神^{もりただまさ}霊社」を造立した時のもので、その詳細は不明である。現在の本殿は、明暦3(1657)年に森家2代藩主^{ながつぐ}長継が再建したもので、棟札も残る。

社殿は東向きに建てられており、昭和初年に建てられた拝殿と釣殿が本殿前方にあり、本殿の周囲は透

かし塀に囲まれる。本殿は大型の三間四方平面に向拝を付け、柿葺の屋根は入母屋造妻入とする。これは中山神社本殿の形式にならったものとみて間違いないと思われるが、しかし、単なる模倣ではなく様々な相違点も見られる。両社を比較してみれば、総社本殿は全体に木柄が細く、向拝の出も少ない。更に、向拝については屋根を向唐破風としながらその上部に両下げ造風の屋根を重ねた二重屋根としている。また、棟飾りに千木や堅男木が見られず瓦積みとしている。

③ 県重要文化財 高野神社本殿



3-① 高野神社本殿

現本殿は、寛文3（1663）年森長継によって再建されたもので、現釣殿・拝殿も当時の遺構である。正面3間、側面4間、入母屋造妻入で向唐破風の向拝を付す。屋根は銅板張（もと檜皮葺）。大棟の両端には大型の鰭をもった獅子口を置いている。軒は二軒繁垂木、蛇腹支輪をもった出組、肘木、木鼻の意匠は唐様、斗拱の間には形の整った墓股を飾るが、全体的に装飾は簡素である。身舎の内部は正面1間通りを外陣とし、後の3間×3間を内陣とするが、その内陣の中に2間×2間の内々陣をつくっている。

④ 県重要文化財 徳守神社本殿



4-① 徳守神社本殿

天文8（1539）年に焼失したが、慶長9（1604）年春、森忠政が築城に先立ち、城下の鎮守として徳守神社を再建、同年内に落成して遷宮され、新田村において70石の社領を寄附された。2代藩主森長継は寛永14（1637）年さらに10石を加増し、寛文4（1664）年に社殿を新築した。現在の本殿・釣殿・拝殿がこれにあたる。

⑤ 重要文化財 鶴山八幡宮本殿

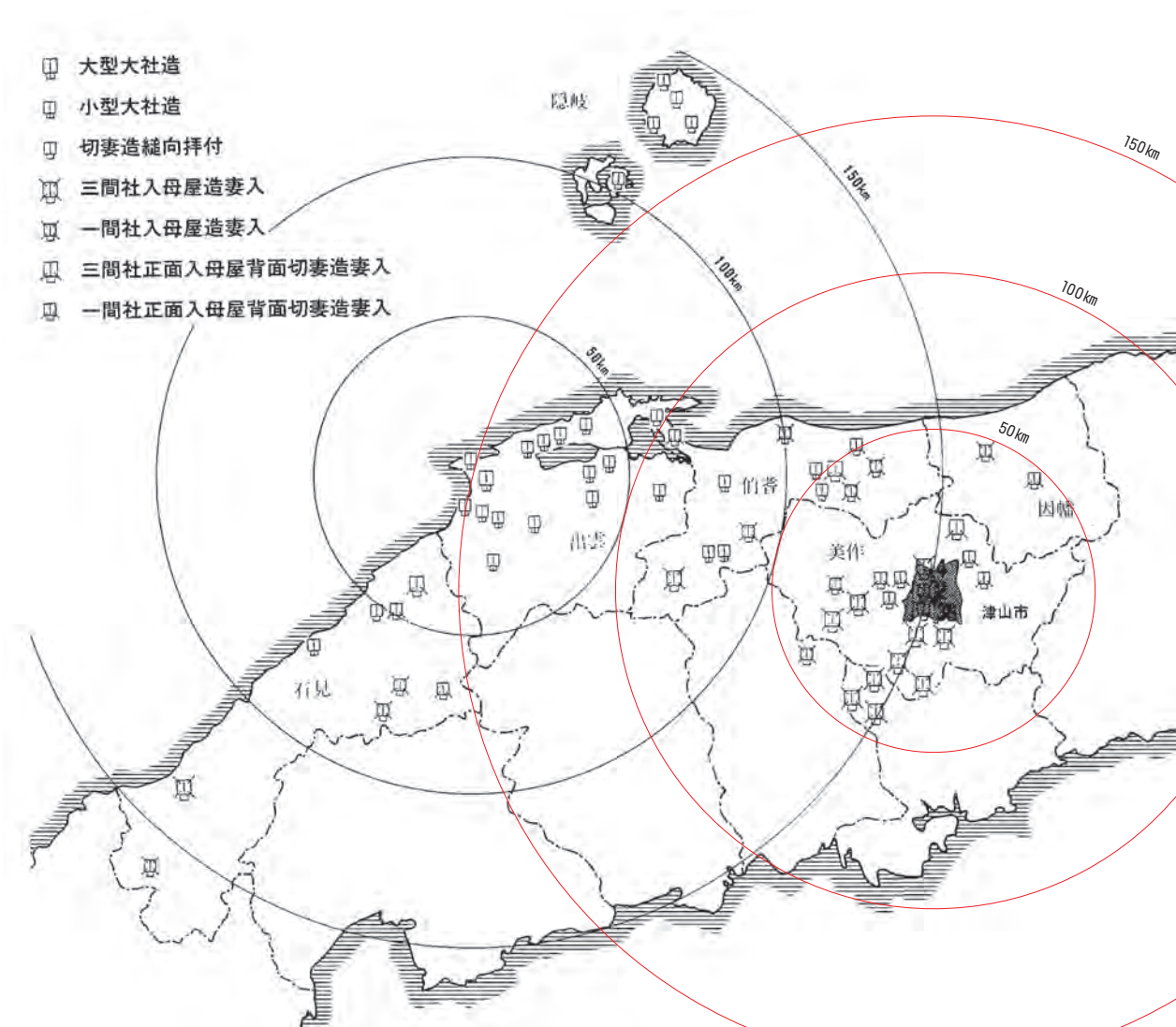


5-① 鶴山八幡宮本殿

慶長9（1604）年森忠政が城地を鶴山に決定した時、当社はその山上にあり、築城に際して南方の^{のぞきやま}観山に遷宮された。しかし、同13（1608）年には城の北西・^{いざよいやま}不知夜山（現在地）に再遷される。これについては、八幡神の神託によるものと伝わるが、社地周辺の丘陵部を牽制するという津山城下の縄張り上の配慮もあったと考えられる。

現在の本殿は、寛文9（1669）年森長継によって建立されたもので、棟札が現存する。『作陽誌』によれば、慶長年間に造営、寛永12（1635）年南向きを東向きに改め（ともに棟札あり）、寛文8（1668）年に修繕して翌年落成とあり、慶長建立の本殿が存続しているかのような記述であるが、寛文の棟札には「奉再建立」とあって、建て替えられていると考えられる。

形式は、方三間、妻入の入母屋造に向唐破風の向拝を設け、屋根は栩葺（元来は檜皮葺）である。特徴はその装飾性にあって、軒の組物を三手先とし、各材先端部の獅子・象・龍、向拝部分の牡丹の彫刻に極彩色を施し、殿内にも極彩色を用いる等、華麗な造りである。



出雲大社と中山神社

(奈良国立文化財研究所「津山の社寺建築」1988 を一部改変)

関連文化財群⑦ 航路ネットワーク 吉井川と高瀬舟

概要

美作の地は、豊富な森林資源の供給地として知られていた。その森林資源を活用して、古代以来の製鉄に加え、紙すきが行われ、また木材加工を仕事とする木地師が活動していた。それらの生産品は、河川を利用した高瀬舟や陸路である街道（姫路から松江にいたる、出雲街道等）を通じて、畿内をはじめとした全国各地へと送られた。また、これらの物流に伴い江戸や上方の文化がもたらされ、河川や街道は、津山の物と文化を支える重要な交通路であった。今回は吉井川と高瀬舟について記述する。

ストーリー

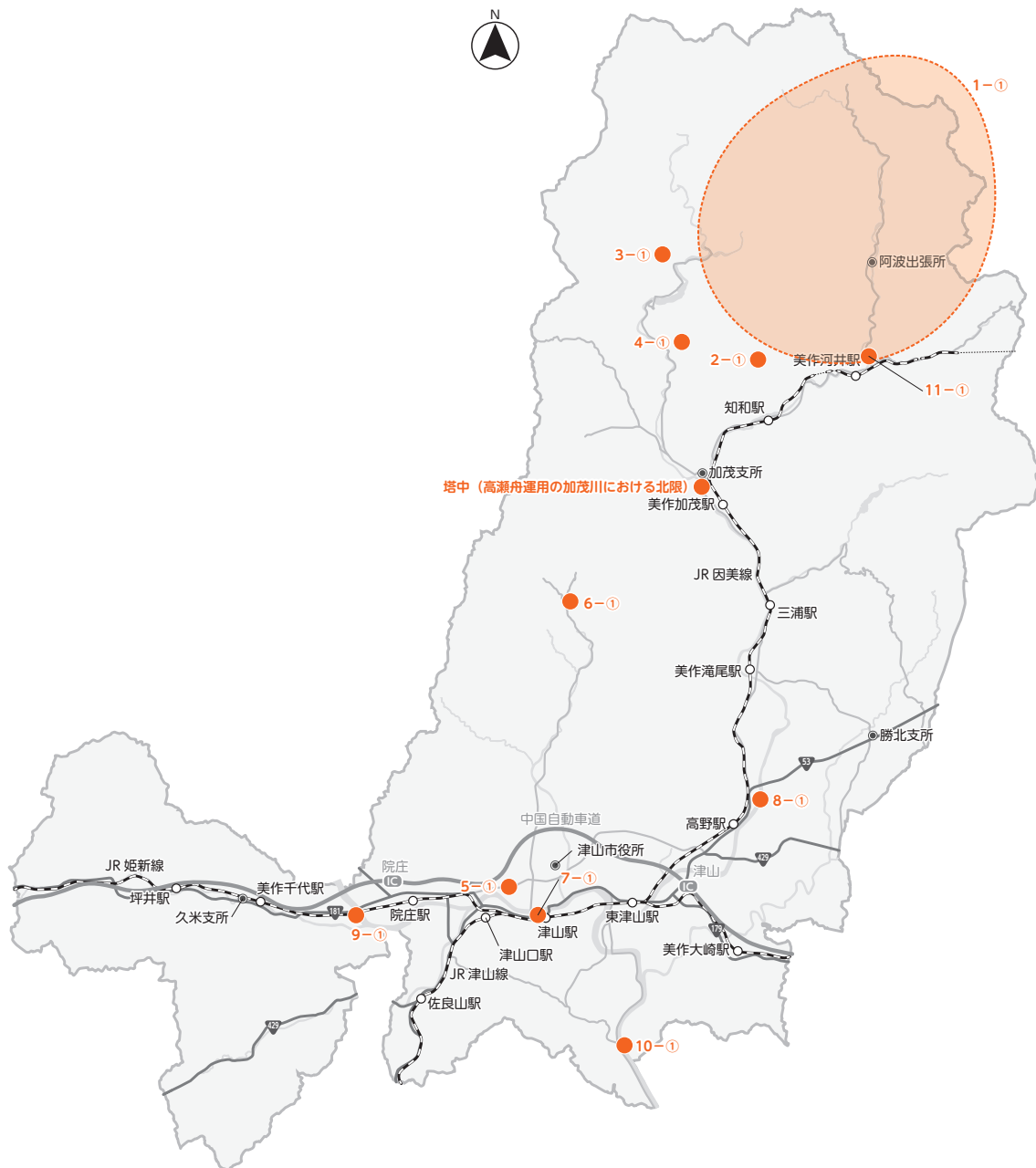
■自然を活かした産業

美作の地は、豊富な森林資源を有していることに加え、吉井川の上流の谷は、谷頭浸食の波及が遅れて浅い谷が多く、各所の小起伏面の存在とあいまって緩やかな高原状の部分が目立つ。このような地形や森林資源を活かして、鉄穴流しとたたらか製鉄が盛んに行われ、また、ろくろを使い、木を加工して木工品を製作する木地師が活躍をしていた。これらの山を利用した人たちは、この地域の独特の風土を作り上げてきた。

江戸時代、加茂地域の山は藩有林である御林や百姓もちの立林のほか野山と呼ばれる入会林野が多くあった。野山には、堆肥や飼料用の柴草山と薪・炭焼用の雑木林があり、後者には松・杉等の用材類も育成していた。明治以降特に大正末頃から林野への造林事業が盛んとなり、この地域を支える産業として成長していった。

また、加茂地域は、古くから鉄の生産地でもあった。特に江戸時代以降、砂鉄を原料とし、木炭を燃料として、地下に床釣りと呼ばれる大規模な保温・防湿の施設を持つ製鉄炉に、天秤鞆と呼ばれる踏鞆から酸素を供給し高殿中で行われる製鉄方法であるたたらか製鉄法で製鉄が盛んに行われた。江戸時代、たたらの経営は、藩によるもののほか、商人や鉄山師と呼ばれる鉱山経営者によって行われた。たたらの操業によって、地域の人達も炭焼きや物資を運ぶ仕事を行い、収入を得ることができた。一方で、砂鉄を採取する工程で下流に濁水が流れ、下流の人達が訴えを起こすこともあった。また、砂鉄採取の過程で、大規模に山を切り崩したため、山の形が変わってしまうこともあり、今でもその痕跡が確認できる。また、製鉄の際にできる不純物である鉄滓（カナクソともよばれる。）は、いたるところで目にすることができ、地元の人たちにとっては珍しい光景ではないという。津山市では、加茂地域を中心に200か所にのぼる

航路ネットワーク 吉井川と高瀬舟



※番号は構成文化財の写真番号

たたら跡が確認されており、そのうち、加茂町黒木地区の桑谷たたら跡とキザナゴ製鉄遺跡は津山市の史跡として指定され、その他も周知の埋蔵文化財包蔵地として保存等の措置が取られている。

木地師とは、ろくろを使って木を削り、盆や椀、杓子を作る技術者のことを言い、江戸時代中ごろから次第に定着し、一部農耕を行いながら作業に従事するようになった。津山市北部の山間部にはこのような木地師集落がみられた。明治以降、木製品の需要は急速に減少するが、津山の木地師の技術は現在に受け継がれており、市内在住の小椋氏は、「木工芸」技術保持者として岡山県の重要無形文化財に指定されている。

また、津山は古くから和紙の製造及び関連産業が栄えた場所で、市街地を南北にながれる宮川流域で和紙生産が盛んに行われた。大正から昭和にかけて西苫田村・津山町・林田町などで7軒程度の紙漉き工場が操業していたが、現在は操業は行われていない。宮川上流の横野地区は、古くから紙漉きが行われてきた地であり、ここで生産される箔合紙と呼ばれる特殊な紙は、多くが金沢に送られ、金箔加工の台紙として利用されている。この和紙を製造する上田氏は、手漉和紙（三桙紙）の技術保持者として岡山県重要無形文化財に指定されている。

■河川を利用した物資の運搬

これらの生産物を輸送するには、河川を利用した高瀬舟による輸送がよく知られている。高瀬舟は規模が概ね全長15m、幅2m程度の薄い板を組み合わせた木造船で底が平らで舳先が高くせり上がった独特な形をしている。船底が浅く平らなことで、水深の浅い川でも運用ができ、津山では、物資運搬において主要な役割を果たした。一時期は塔中（加茂地域）まで運用されていたが、江戸から明治にかけて常に運用されていたのは津山までである。津山での高瀬舟の発着場は、東は百間堤（東新町）、西は明石屋淵（安岡町）、そしてその中間の船頭町付近にあり、これらの河岸には、各地からの物資が集積することとなった。そのうち船頭町のものは、今の城見橋付近にあり、「大雁木」と呼ばれる堤防から降りる急な石段を設け、今の今津屋橋周辺には藩の船蔵や番所が置かれ、河原町には藩の年貢米蔵もあった。江戸時代には高瀬舟は藩の厳重な統制（例えば、高瀬舟への積載統制など）に加え、川水の増減などの自然的な理由や、下りに2日、上りに4日かかるといった技術的な制約により、自由な運航を行うことはできなかったが、江戸時代は森・松平両藩のもと発展し、明治期に入ると藩の制約がなくなり自由に運航できるようになると、高瀬舟は本格的な活躍の時期を迎える。しかし、自然的・技術的制約に加え、明治31（1898）年に中国鉄道が津山・岡山間で開通すると、鉄道との競争で劣勢を強いられ、衰退の道をたどっていく。高瀬舟がいつ頃まで運用されていたかについては、詳しい記

録は残っていないが昭和の初め頃には終焉を迎えていたようである。高瀬舟が運行されなくなり、その遺構はほとんど失われているが、檣地内の「市史跡檣船着場跡の常夜灯」と宮尾地内の「市史跡中須賀船着場石灯籠」はともに津山市指定の文化財として保存の措置が講じられている。また、押湊地内には、川の中にある大岩の「川中山王権現」の岩肌に上りの舟を引き揚げた曳綱の後が数多く残り、当時の苦労がしのばれる。

また、加茂・阿波地区の山で切り出された木材は、筏で組んで川を流送した「筏流し」が行われていた。それを今に伝える遺構は確認できないが、筏を組んだ場所を示す「筏場」の地名が、加茂町河井に残っている。

構成文化財

① 青柳杣



1-① 青柳杣

現在の加茂・阿波地区にあたり、鎌倉・室町期の記録によれば、本圀寺・下賀茂神社・園城寺等に木材を供給していた。

② 白金山



2-① 白金山

砂鉄を採取する作業では、大規模に山を切り崩したため山も形が大きく変わってしまうこともあった。現在でもそのことが確認できる場所が加茂地区には多く見られる。

③ 市史跡 桑谷たたら遺跡



3-① 桑谷たたら遺跡

この遺跡は、大量の鉄滓が出土していることに加え、付近に鉄穴流し地形が見られることに特徴がある。たたら操業の時期は、いずれも江戸時代と推定されている。

④ 市史跡 キナザコ製鉄遺跡



4-① キナザコ製鉄遺跡

この遺跡は、急峻な倉見川支流の西斜面上位に位置する。発掘調査で検出された焼土面から、製鉄炉は長辺約90cm、短辺約70cm、高さ約65cmの箱型炉に復元することができる。炉壁の厚さは約15cmで、長辺には3ヶ所の送風孔が設けられている。出土した須恵器から、本製鉄遺跡の時期は8世紀半ば頃と推定されている。

⑤ 県重要無形文化財 木工芸



5-① 木工芸技術

小椋芳之氏は、昭和22(1947)年に津山市鉄砲町で木地師の家系小椋六助の長男として生まれ、父に師事し木地師及び塗師技術を学んだ。小椋家は、代々、鏡野町羽出に居住した千軒木地師であり、芳之氏は、数少ない千軒木地師及び塗師の技術継承者で、高度な技術を有している。

⑥ 県重要無形文化財 手漉和紙(三桎紙)



6-① 横野和紙製作技術

上田家は、初代長吉が文化年間(1804～1818)に津山松平藩の御用紙を漉くことを拝命して以来、200年にわたり技術を継承してきた。現当主の上田繁男氏は6代目になる。昭和17(1942)年に津山市上横野に生まれた。父に師事し、技術の研鑽に努め、数々の賞を受賞した。手漉和紙(横野和紙)は、薄くかさばらず表面がなめらかで、金箔を傷つけることもないため、箔合紙として日本一の名声を得ている。

⑦ 船頭町(高瀬舟の発着場)



7-① 船頭町(高瀬舟の発着場)

ここには、高瀬舟の発着場があり、近くの今津屋橋周辺には、藩の船蔵や番所が置かれ、河原町には川戸蔵と称した藩の年貢米蔵があった。

⑧ 市史跡 櫓船着場跡の常夜灯



8-① 櫓船着場跡の常夜灯

津山藩は、吉井川の支流加茂川と因幡往還との接点である櫓村に船着場を設け、年貢米等の積み出しの便を図った。船着場には石雁木、荷揚げ場、米置き場、詰所などの施設の他に常夜灯が付設されていた。

本常夜灯は、花崗岩製で高さが3mあり、常夜灯の型式は高灯籠型で、3m弱の基礎石垣の上に乗っている。銘文によると、天保9(1838)年の製作で、作者は櫓村住人・北田申兵衛とある。舟運の遺構がほとんど失われた今日、高灯籠型の常夜灯は、吉井川水系では他になく大変貴重なものである。

9 市史跡 中須加船着場跡石燈籠



9-① 中須加船着場跡石燈籠

吉井川西岸にある3基の灯籠からなり、うち1基は金比羅灯籠で、嘉永7(1854)年の刻字がある。もとは高瀬舟船着場にあったものである。残る2基は内宮・外宮と刻まれた灯籠で、明治元(1868)年の刻字がある。いずれも中須賀の東端に建てられていたものといわれている。中須賀は、吉井川の川湊として栄えた場所で、鉄道等の開通によりその役割を減じた後も昭和10年代頃まで常夜灯として点灯されていた。灯籠には、近在の人々をはじめ、遠くは播磨地域の人名もあり、当時の人・物の交流や、信仰等を推し量ることができる。

10 川中山王権現



10-① 川中山王権現

川の中にそびえる大岩で、岩肌には上りの舟を引き揚げた曳綱の跡が残り、当時の重労働をしのばせる。

11 「筏場」地名



11-① 「筏場」地名

木材は、木材を筏に組んで河川を利用して運搬された。その筏を組んだ場所を示す、「筏場」の地名が今に残る。

関連文化財群⑧ おいしい津山の食文化

概要

津山地域は江戸時代からの「養生食」の習慣があると言われ、古くからの食肉文化を今に伝えている。また、城下町においては、森・松平を通じて茶の湯文化に伴う和菓子の伝統が伝わっている。これら江戸時代以来の食文化は現在の津山市の食風土を形成する重要な要素となっている。

ストーリー

■牛馬の飼育と肉食の由来

津山地域は古くから「養生食」の習慣があると言われ、独特の牛肉文化を今に伝えている。

日本の畜産の歴史を紐解くと、古く律令制により官牧の全国的設置は文武天皇4（700）年に始まった。延喜兵部省式によると、牛牧設置は全国に11か国15牧あり、この中には備前国長島馬牛牧も含まれていた。津山では慶雲2（705）年に牛馬市場が開市されていたという（『岡山県畜産史』岡山県畜産史編集委員会）。

江戸時代、17世紀末頃から、大坂天王寺市場は、中央消費地における一大供給地として、近畿はもとより中国・四国あるいは遠く九州から牛馬商人が集まり盛況を極めた。その様子は『日本山海名物図絵』に「備前、備中の国おおく牛を飼て子を産す。すなわちこれを天王寺におくる。（中略）年中、備前、備中より牛を引き来ること日々にたえず」と記され、備前・備中で牛馬が多く飼育されていたことがわかる。ところが18世紀後半、備前の比重が低下し、これに代わって美作の比重が高まり、幕末には美作が牛の供給の中心となり、久世（現真庭市）と一宮（現津山市）の牛市が、牛を送り出す中心市場として繁栄したことがわかっている。

一方、我が国では古代においては、肉食をしていた。7世紀後半の天智天皇の時代には盛んに牛馬の繁殖を奨励し、肉食をしたという記事もある。しかしながら天武天皇は675年、仏教の教えにより「牛馬犬猿鶏の肉（肉）を食することなかれ」という肉食禁止令が出されて以降、江戸時代に至るまでの1,000年以上もの長期間、一般日本人の間に肉食、特に牛馬豚の肉食を嫌悪する風習が定着した。

このような状況の中、江戸時代においては彦根藩井伊家が毎年赤牛の味噌漬けを将軍家に献上していたことは有名であるが、津山においても「養生食」が行われていたと伝えられている。それは博労（牛や馬の仲買商人）の間で流行していたといわれ、上記のように幕末には津山周辺の牛市が繁栄していたこともあり、街道筋で最大の都市である津山において広く「養生食」が

流行することになったという。

明治 12 (1879) 年に当時の陸軍がまとめた全国主要物産には、東南条郡川崎村（現在の津山市川崎）の牛肉として掲載されており、津山の牛肉は全国的にも有名であった。その証拠に、開国後外国人が多く日本に入ってくる中で、神戸に逗留した外国人は津山の養生食いのおかげで牛肉の入手に苦労しなかったと言われている。

■郷土料理としての肉食

そのようなことから、津山の牛肉食文化は深く庶民に根付いており、牛肉のブロックを数日間干してうまみを凝縮させた「干し肉」、牛肉の骨の周りの肉をそぎ落とした肉を使う「そすり鍋」（津山では方言で肉をそぎ落とすことを「そずる」という）、牛のすじ肉をとろ火で煮込みスープになったものを冷やし固めたコラーゲンたっぷりの「煮こごり」、牛の大動脈を短く切った「ヨメナカセ」、ご当地グルメで有名な「津山ホルモンうどん」等、肉の旨さを最大限に引き出した食べ方が今に伝わる。

■初代津山藩主森忠政と茶の湯

元亀元 (1570) 年～慶長 4 (1599) 年、森忠政は美濃金山城主として東海地方に一定の勢力を保っていた。その金山城跡で昭和 44 (1969) 年に行われた発掘調査では、久尻窯・大平窯・小名田窯・浅間窯といういわゆる美濃焼の窯で焼成された陶器が多数出土している。おそらくこれらは同城主森氏に納入されたものと推定され、桃山茶陶の生産に森氏が関与していたことを裏付ける資料となっている。

森忠政自ら茶を嗜み、茶匠今井宗久・千利休・津田宗及・古田織部らと交流し、織豊期に茶の湯が武家社会に浸透するなかで、森氏は美濃焼を積極的に保護し、窯業の技術革新を促進させたものと思われる。

美濃金山においてこのような実績を持つ森忠政であるので、美作に入国後も茶の湯を積極的にたしなんだと思われるが、残念ながらそのあたりを示す文書は残っていない。

■津山松平家と茶の湯

津山松平家は、徳川家康の二男秀康を祖とする越前松平家の直系であり、陸奥白河藩（福島県白河市）より養子入りし、家督を嗣いだ松平宣富が、初代藩主として津山に入り、幕末まで津山藩松平家として続いた。

津山松平藩文書『国元日記』によると、宝永 4 (1707) 年 3 月に本丸御殿で茶事が行われている。

この日、宣富は正午に松平綱国（越後高田藩主光長の世継であつたが、延宝8（1680）年の越後騒動により福山へ配流された。その後貞享4（1687）年に赦免され、元禄11（1698）年に宣富とともに津山に入り、「宮川下屋敷」に隠棲。波乱の多い人生を送った人物である。）を本丸御殿に迎え、料理と能でもてなし、夜10時に見送った。芥子之間の床飾りは寿老人の掛け物と立花二瓶であつたと記される。この部屋には付書院はないが、硯と紙を置いている。本丸御殿で大名による茶の湯が行われた貴重な記録である。数日後、今度は綱国が宣富を自身の隠居屋敷に招いた。綱国46歳、宣富28歳の時であつた。

■大名茶人松平不昧公との縁

松平治郷（不昧）が茶室・大圓庵を造営した月照寺（松江松平家菩提寺、松江市）には現存する唯一の肖像画とされる松平不昧肖像画が残されている。製作は没年にあたる文政10（1827）年孟冬（10月）。文久3（1863）年冬に松江藩士の高橋九郎左衛門長徳が藩主に献上したと伝えられる。

この肖像画には由来を記した文書が添えられ、「不昧が津山で痘瘡に罹って逗留した時にこの肖像画を貰った」とある。大正時代に松平家が編纂した『松平不昧傳』によると、由来書には次のように記しているという。「大圓院様之御肖像、不思議に手に入りければ、手前に奉安置候も恐入候に付、殿様へ献上仕候へば、御嬉不斜、直に月照寺へ御納に相成り、仍而此幅拝領被仰付候事 但此幅は於津山御痘瘡被遊御煩候節、御賞被遊候由 慶応元年丑年」

これによると同肖像画は津山を通行した折に津山藩松平家から贈られたものという。しかし、不昧が津山で痘瘡に罹ったという記録は見当たらない。文中の「大圓院様」は不昧の法号。不昧は晩年の文化9（1812）年に京都大徳寺孤蓬庵に大圓庵を建立。茶室、寿塔、庭園の造営を行い、文政元（1818）年4月24日に逝去している。

法衣を身に着けた不昧の肖像画の上には、幕末の名僧・漢三道一（1757～1825）の賛がある。

喫茶喫飯六十年 不昧一言一不昧

雲州國裏留難往 倒跨須弥上梵天

津山藩主と同じ松平氏であり、江戸との往復には津山を必ず適行するなど、両家は代々交流を重ねてきた。大名が他藩を通過する際は、城下を避けるのが通例であるが、不昧は二階町にあった町年寄玉置家で茶の接待を受けていることが記録から知られ両松平家の浅からぬ関りがうかがわれる。

■津山藩の菓子文化

上記のように森・松平両家共に茶の湯に少なからず関りを持っており、それに伴い、津山城下では古くから様々な菓子が作られていた。

江戸時代の天保年間（1830～44）には、津山藩松平家が、軽焼、焼饅頭、巻松風、巻煎餅、薯蕷、葛御菓子、白雪羹等の菓子類のほか、葛粉、白砂糖、氷砂糖等の菓子・菓子原料類を幕府に献上している。

特に将軍家から養子入りした斉民（第11代将軍家斉の子）が天保3（1832）年に藩主になると、江戸大奥へ膨大な数の菓子が日常的に贈られた。最も喜ばれたのが軽焼であったという。

明治になると、東京の斉民は津山の「初雪」をしばしば大量に取り寄せている。旧藩主時代によく国元の津山で製造された軽焼を献上していたその名残と思われる。おそらく、津山銘菓の「初雪」は江戸時代に津山の特産品となった軽焼に付けられた雅称だろう。

■今に残る和菓子

現在でも城下町及びその周辺には10を超える和菓子店が存在しており、中には操業150年を超える老舗もある。それぞれが創意工夫を凝らした菓子を作り、中には茶事には欠かせない菓子を供給し続けている店もある。

構成文化財

肉料理

① 干し肉



1-① 干し肉

牛のもも肉のブロックを数日間干してうまみを凝縮させたもの。

1. 肉を塩と醤油などの調味料で作った調味液に肉を1時間ほど漬ける。
2. 肉を干し網や洗濯ネットなど、風が通るような干し場で重ならないように丁寧に並べて乾燥させる。
3. 7～10時間ほど乾燥させたら、冷蔵庫で熟成させる。
4. 乾燥と熟成を2～3日繰り返す。

② そすり鍋



2-① そすり鍋

牛肉のあばら骨の周りの肉をそぎ落とした肉を使う鍋料理。

1. そすり肉・白菜・白ネギ・えのき・しめじ・大根・豆腐を適当に切る。
2. 鍋に酒と醤油を入れひと煮立ちをさせる。
3. 肉を入れ、その後火の通りが悪い順番に野菜を入れてる。
4. 火が通るまで約10分間程度中火にかける。
5. 最後に豆腐を入れ豆腐に火が通れば、一味で味を調える。

③ 煮凝り



3-① 煮凝り

牛のすじ肉をとろ火で煮込みスープ上になったものを冷やし固めたもの。

1. 鍋に牛アキレスと水を入れて強火にかける。
2. 沸騰したら中火にしてアクを取りながら3時間煮たら、一口大に切る。
3. さらに2時間煮て、しょうゆで味付けする。
4. さらに弱火で2時間煮込む。
5. あら熱が取れたら、冷蔵庫で一昼夜冷やして固める。

④ ヨメナカセ



4-① ヨメナカセ

牛の心臓につながる大動脈を短く切ったもの。

下処理済みのものが市販されており、一般家庭でも食べられている。調理法としては、炭火焼きのほか、天ぷら、唐揚げ、バター炒め、湯引きなどでも食される。

⑤ ホルモンうどん



5-① ホルモンうどん

鉄板焼きの焼きうどんの一種で、具材に牛ホルモンを多く使用する。

1. うどん 2 袋・ホルモン 150 ～ 200g・キャベツ 適量・たまねぎ 1/2 個・タレ 適量・長ネギ 適量・もやし 適量
2. 強火で熱したフライパンで、油を引かないでホルモンを焼く。
3. 少し焼けたらキャベツ、たまねぎ、長ネギも加え炒める。
4. ホルモンうどんのタレを少し加えて炒め合わせ、うどんを加える。
5. ホルモンうどんのタレを加え、全体を混ぜ合わせながら炒める。

和菓子関係

⑥ 千本桜



6-① 千本桜

梅肉入りの求肥を麩焼の煎餅で巻、すり蜜をかけた菓子。

⑦ 初雪



7-① 初雪

自家栽培のもち米と砂糖だけを使い、古くから伝わる製法を守り時間を掛けて丁寧に作り上げた伝統的な菓子。

概要

津山城下町は、東・北・西側を社寺で取り囲むような配置の城下町である。城下町の中には城下惣鎮守である徳守神社、藩主森家ゆかりの寺である妙願寺があるのみで、それ以外の社寺は東・西・北の城下町縁辺分に配置している。特に西寺町は出雲往来沿いに広大な敷地を有しており、いざというときの兵溜まりの役割を果たすような構造となっている。

ストーリー

■城下町の成り立ち

近世の津山城下町は、西の小田中丘陵から東の丹後山南麓にかけての吉井川北岸一帯に形成されており、鶴山に築かれた津山城を中心に、東西約 3.3km、南北約 1.3km にわたる東西に長い平面形態を示す。こうした町の形態は、初代藩主森忠政により計画されたものである。

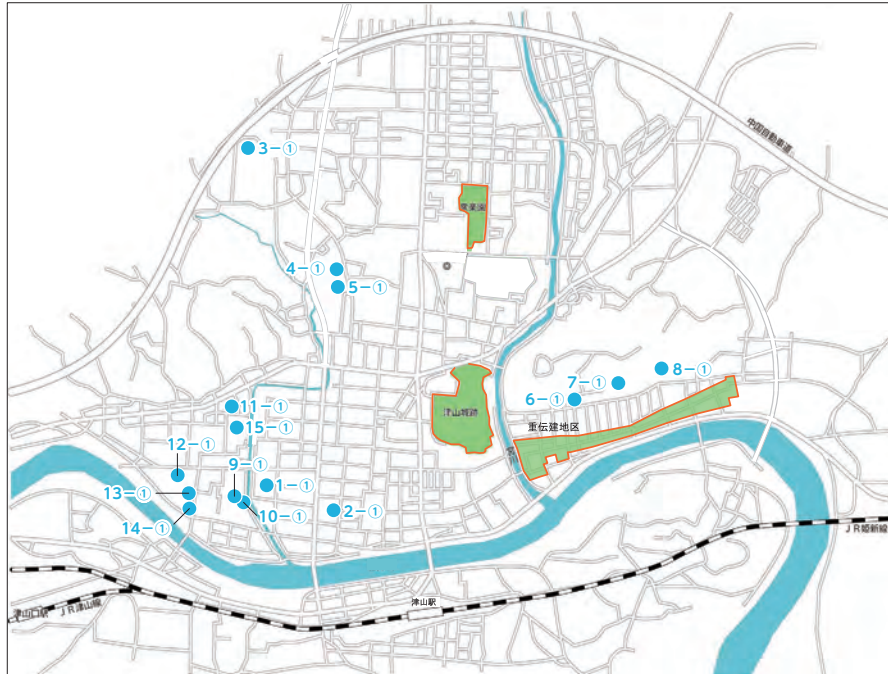
慶長 8（1603）年、信州海津（のちの松代）の城主であった森忠政は、慶長 5（1600）年の関ヶ原戦で勝利を収めて名実ともに天下人となった徳川家康が戦後措置としてとった一連の大名統制策に関連して、美作国一國を与えられ 18 万 6500 石の大名として入封した。『森家先代実録』によると、森忠政はひとまず中世以来の美作守護所であった院庄に居館を構えたが熟慮の末、盆地中央の鶴山を築城地としその周囲に新たに城下町を建設することを決意した。

城郭の築かれた鶴山は、丹後山山系の西南にあり宮川によって分離丘陵となった小丘である。室町時代にはこの地に美作地方に勢力をはった山名氏の一族山名忠政によって城砦が築かれていたといわれる。森忠政が入国した頃には山上に山名氏の勧請した鶴山八幡宮や小祠千代稻荷宮が、また中腹には福聚山妙王院（日蓮宗）があって、その周辺には屋後町（八子町）が形成されていたといわれ、現在の城跡の景観とはずいぶん異なる状態であったらしい。また鶴山の山裾や丹後山の南麓には、出雲街道に沿って戸川宿や林田宿が賑わいをみせ、定期市も開かれていた。

森忠政は、築城に際しこれらの社寺や集落を城下の各所に移転させることにし、慶長 9（1604）年の春鶴山を津山と改めて築城を開始し、まず手始めとして戸川村の鎮守であった徳守神社を現在地に移建し津山城下の総鎮守とした。そして、周到な町割りに基づき城下の建設を推進していったのである。

津山城の普請は国の総力を結集して行われたが、度々の出陣や幕命による城普請などが重なったこともあって、起工から 12 年目の元和 2（1616）年の武家諸法度の制定により、完成半ばで

城下町を守る社寺



※番号は構成文化財の写真番号

築城を終了したようである。

一方、城下もこの頃までに内山下、田町をはじめとする武家屋敷地や城西の坪井町、城南の木知ヶ原町（後の堺町）、城東の勝間田町あたりが出来上ったといわれ、その後も町は次第に出雲街道沿いに拡張していった。

近世における城下町は、軍事拠点であるばかりか領国とその領民を統治する政治都市、経済都市であることが要求された。従って、そのための適地として水陸の交通の要衝であり周辺の生産性が高く大規模な城下を築く広大な平地があり、しかも全体として要害の地が求められた。鶴山を中心とする一帯は、吉井川、宮川、^{いたがわ}蘭田川の氾濫原であり、背後に小田中丘陵および丹後山山系が連なる要害の地であった。また、古来からの街道である出雲街道や河川交通の望まれる吉井川に沿って林田宿、戸川宿が賑わった土地柄であり城下町を経営する立地としては理想的な場所であったことがわかる。

一般に、近世城下町は、豊臣秀吉の太閤検地や刀狩り等の諸政策によって次第に確立していった近世的身分制度を反映した厳格な空間秩序に基づいて構成されている。城下に居住を許される者は、武士と町人（商人・職人）等に限定され、農民は農村部に居住を余儀なくされた。しかも、城下では武士と町人の居住地がはっきりと区別されていた。

近世の津山城下の平面形態は、城下絵図によって伺い知ることができる。すなわち、城下は大きく、宮川以東・城内および内山下・宮川から蘭田川・蘭田川以西の地区に区分できるが、城下の多くは武家屋敷地でしめられ、その大半が城下の北側に分布し、これと南新座、南馬場前、東西鉄砲町といったやや形成時期が降る武家屋敷に挟まれる形で出雲街道沿いに町人地がおかれ、城下の外郭にあたる町の東北部及び西端部に社寺地が配置される形になる。

なお、このほか享保 7（1722）年の絵図によれば、丹後山麓の斜面に重臣達の下屋敷が置かれている。これらは丹後山の由来が森藩の家老の一人大塚丹後の名前をとって名付けられたといわれることから、森藩時代に開かれたと考えられる。また、津山城の北方には、現在衆樂園として一般に公開される苑池があるが、これは森長継によって明暦年間頃（1655～1657）に開設、「御対面所」と名付けられた施設で、城主の静養の場として、また他藩の使節の接見の場として使用された。

森家統治時代の津山は、社寺地を除くと、武家屋敷地約 50 町歩、町人地約 29 町歩であったといわれ、武家屋敷地は 6 割を超えていた。

こうした城下の空間構成は、森家除封ののち元禄 11（1698）年正月新たに森家旧所領のうち 10 万石を受け継いだ松平宣富を祖とする津山松平藩 9 代 172 年の治政下においても基本的に踏襲されていった。



津山城下町絵図

■森忠政の都市計画

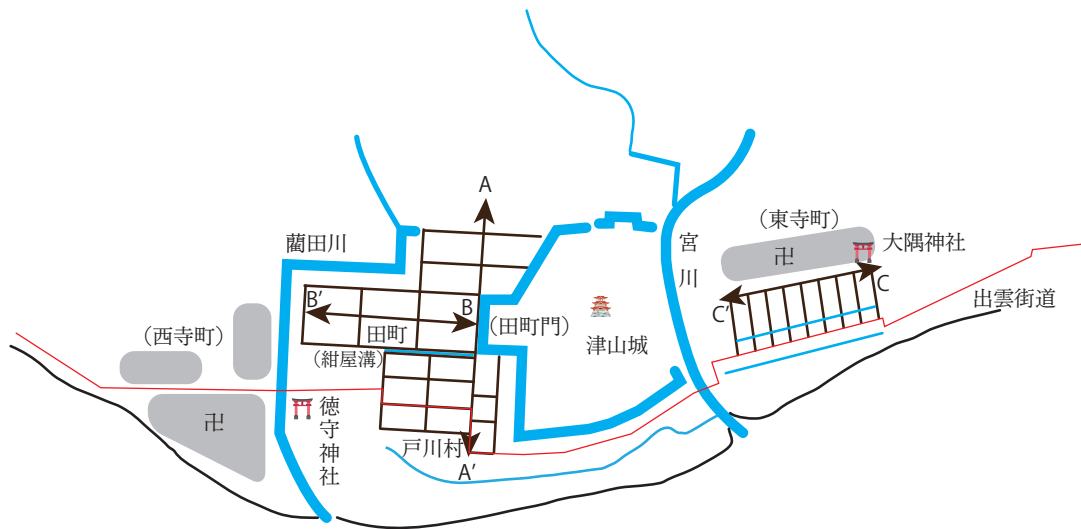
ここで森忠政の計画した津山城下の町割（都市設計）の基本についてふれておこう。

津山の建設に関する資料は乏しいが、近世の城下絵図に描かれた城下町の平面形態を1/2500 地形図（都市計画図）を用いて復原してみると、城下町が地形を巧みに読みとった周到な計画に基づいてつくられていることが判る。

享保7（1722）年の「津山御城下惣絵図」には、田町、椿高下、南新座等上・中級の武家屋敷地の敷地寸法が記載されており、これを手掛りとして城下の復原を試みると現在の津山の都市構造は、旧状をほぼ踏襲していることが明らかになる。城下町中心部を例に、森忠政が津山の城下をどのように設計していったのかを考えてみたい。

津山城下のなかで初期に形成された地域に注目してみると内堀の西辺と藺田川（田町と椿高下境から徳守神社付近）に挟まれた地区及び宮川以東で中之町と西新町境までの上之町西半部の2地区は、極めて整然とした街区構成になっていることに気づく。

これらの地区はその位置や形態からみて城下建設にあたり、まず最初に町割が施された地区であると考えられる。津山城の城地となった鶴山は、丹後山の分離丘陵であり、東辺を南流す



城下町概念図

る宮川は天然の堀としての機能を果たすことが期待される。南、西、北の三方に堀を廻らすことは築城と同時に行われたに相違ない。

堀割の形で注目されるのは、北及び南の二方向は地形に沿う形になるのにくらべて、西辺は田町門位置に張り出しのある直線的な堀割になっていることである。この張り出し部は城下の中央地域の空間構成を規定する大きな要素として位置付けられる。というのもこの張り出しの外側（城外）には、町の中央部を南北に貫くように通る直線街路（A～A'）があつて、この街路の西側にこれに直行する街路及び並行する南北街路によって構成される規格街区が武家屋敷地（田町）及び東西水路（紺屋溝）を隔てた南の町人地とも一体的となって整然と形成されているからである。

またその西方には小田中丘陵を南東に流れる蘭田川が、田町の東北から徳守神社に至る間のみ人工的な屈曲を見せている。

蘭田川沿いに位置する武家屋敷の敷地奥行き寸法は田町地区に共通する奥行き寸法の20間前後であり、また元戸川村の鎮守であつた徳守神社が築城にあたり津山城下の総鎮守となり慶長9（1604）年に手斧始めとして建築されたことを考えると、蘭田川はもとは地形に沿って南東に流れ吉井川に注いでいたものと考えられるが、規格的な田町地区を覆うようにして屈曲しているので、城下町建設に先立って田町地区を囲む外堀として開削されたものと位置付けられる。これらの地区は、おそらく内堀を築くと同時に造成されたものであり、森忠政が意図した基本的な街区設計を良く具現した地区と考えられる。

ここで、田町地区の街区構成をみると、南北道（A～A'）を縦軸に、田町門に通じる東西道（B～B'）を横軸にして、田町門付近の堀幅（南北幅）から割り出された街路間隔（南北道路は

等倍、東西道路は1／2倍)によって区画されたとと思われる整然とした街区(東西約165m、南北約82.5m)が中央に8区画あり、その他の街区もそれに準拠したものとなっている。

また、細工町、下紺屋町～戸川町に至る町人地の地区構成をみると、東西溝(紺屋溝)を境に武家屋敷地とは分離されるが、南北路(A～A')を軸にこれと直角に西へのびる3本の東西路と2本の平行する南北路によって区画された東西約127.5m、南北約75mの街区が6区画整然と並んでいる。この6区画の内に出雲街道が取り込まれて城東地区や近在の村々と結ばれている。

一方、上之町周辺地区は、田町地区及び南の町人地地区とくらべてそれほど規格的な地区ではないが、丹後山南麓沿いを東西に走る道路(C～C')を軸に設計したと思われる南北に長い街区構成になっており、南端は出雲街道沿いに西から橋本町、林田町、勝間田町といった町人地が形成され、勝間田町の西端で出雲街道が屈曲して枡形を構成している。このように上之町周辺地区は、地形的な制約のためか南北街区が主体となるが、武家地が北の丘陵地に、町人地は南の低湿地に形成され、両者の間は田町周辺地区と同様に排水溝によって空間的に分離されている。

■城下町周辺に配置された社寺群

これまで述べてきたように、津山城下町は初代藩主森忠政の周到な都市計画により形成されたものであることは明らかである。

その中で城下町内に形成された社寺は城下総鎮守の徳守神社と、森家所縁の寺院である妙願寺が存在するのみで、その他の社寺は城下の外縁に配置されている。このことについて少し考えてみたい。

近世城下町の平面形態にみられる特色の一つに、寺町と称すべき寺院集中地区が町の外側に置かれる場合が多いことがある。これは一般に寺院が広い境内の内に巨大な寺院建築を建て、これが有事の際の軍事施設に早替りすることから城下の要衝を固める意味で設置されたと解釈されている。津山城下では、蘭田川西岸地区(西寺町)及び上之町北端地区(東寺町)の2地区が寺院集中地区となっている。

西寺町は城下建設当初から、蘭田川の西岸、旧小田中村の南域を区切って広大な土地を造成してつくられている。森忠政時代に旧領国の美濃金山から従った僧俗が涅槃寺(のちの泰安寺)、来迎寺(成道寺)の浄土宗寺院2ヶ寺を建設したのをはじめ、森長継時代の明暦2(1656)年に臨済宗永寺の建設に至る半世紀の間に内外の寺院を移建・創建したがその数は24ヶ寺にのぼる。

これらの寺院の幾つかは度々移建されたものもあるが、特に日蓮宗妙法寺はもと鶴山に開か

れた古刹で、慶長9(1604)年の築城にあたって、城西の南新座に移された。しかし元和初(1615)年この地が武家屋敷地にあてられることになったため、同宗派の本行寺、妙勝寺の2寺とともに現在地に再建されたものである。

城東に置かれた東寺町は、上之町背後に位置し、丹後山南麓に沿って東西に配置された。西方に本蓮寺・蓮光寺の日蓮法華宗2ヶ寺を、東端に林田村の産土神である大隅神社を移建したのをはじめとし8ヶ寺1社を置いた。

城下の北側には、元鶴山の地にあった鶴山八幡宮が移され、そのすぐ北には古来よりの総社宮が鎮座し、南にはのちに東照宮が置かれた。

先にも述べたが、これらの社寺群の配置は有事の際の軍事施設としての意味合いを持っているのであり、城下に通じる東・西・北のいずれの街道も、街道に面して社寺が立地している事がわかる。ただ、津山城下町全体を見渡すと、特に西側の社寺地は出雲街道を挟んで南北に広大な敷地を有していることは明らかであり、城下町建設当時に成立したこの町割りは西からの攻撃を特に念頭に置いた配置のように思われる。

No.	寺院名	宗派	創建(移建)時期	沿革
1	本源寺	臨済宗	(慶長12年)	森家の菩提寺、寺領200石、もと龍雲寺、天和3年現号に改称。
2	宗永寺	臨済宗	明暦2年	森長継亡母森氏のため創建、寺領150石、森家改易後衰退。
3	寿光寺	臨済宗	慶長頃	森可政の菩提寺、もと景德寺、宝永4年現号に改称。
4	愛染寺	古義真言宗	慶長10年	もと金剛寺、森長継厚遇し祈願所とする。延宝年間に現号。
5	大圓寺	天台宗	(慶長頃か)	もと善六寺、二階町付近にあり築城時に移建、元禄迄に現号。
6	聖徳寺	真言宗	不詳	もと寂静院と号したというのが創立沿革等不詳。
7	栄巖寺	浄土宗	寛永9年	もと松樹院、享保13年現号に改称。廃寺。
8	宗堅寺	臨済宗	寛永11年	森家家臣の創建、森家改易と共に衰頹。廃寺。
9	泰安寺	浄土宗	(慶長9年頃)	もと涅槃寺、元禄11年松平家の菩提寺となる。元文4年現号。
10	成道寺	浄土宗	(慶長9年頃)	もと来迎寺、泰安寺とも美濃兼山以来の古刹、宝暦3年現号。
11	本覚寺	浄土宗	寛永3年	美作出身の僧存得の創建。
12	成覚寺	浄土宗	慶長9年	森家家臣の創建。
13	光巖寺	古義真言宗	(慶長19年)	もと清服寺、延宝2年現号となる。
14	福泉寺	古義真言宗	元和9年	元禄4年、愛染寺末となる。
15	大雄寺	臨済宗	慶長末年	森家家臣戚族の創建。
16	溪華院	臨済宗	元相初年	関成次亡妻(森忠政の子女)のため創建、森家改易後衰退、廃寺。
17	大龍寺	曹洞宗	不詳	寛文4年宝珠寺と改称、元禄頃から衰退し、寛保年中廃寺。
18	長安寺	曹洞宗	正保元年	安永年中、作州曹洞宗の総禄司となる。
19	大仙寺	臨済宗	不詳	創立沿革不詳、寛保以降衰退し、宝暦年中廃寺。
20	大乘寺	日蓮宗	不詳	享保年間後無住となり衰退、明治5年廃寺。
21	妙法寺	日蓮宗	(元和初年)	もと鶴山西腹にあり、築城に際し初め南新座のち現地に移建。
22	本行寺	日蓮宗	(元和初年)	築城に際し初め南新座のち現地へ移建、享保元年再興。
23	妙勝寺	日蓮宗	(元和初年)	築城に際し初め南新座のち現地へ移建、寛文の禁令で妙法寺共転向。
24	顕性寺	日蓮宗	不詳	寛文年中の弾圧で本行寺とも衰退、享保元年再興。廃寺。

構成文化財

① 徳守神社



1-① 徳守神社

慶長9（1604）年秋、森忠政は徳守神社社殿を造営し、城下町の総鎮守とした。現在の社殿は、寛文4（1664）年に新築されたもので、拝殿・釣殿・本殿がともに残っている。本殿の形式は中山造である。

② 妙願寺



2-① 妙願寺

妙願寺は、森忠政の母、妙向禅尼によって、天正年中（1573～91）美濃金山に建立された。その後、忠政の美作入封に際して行動を共にし、元和3（1617）年に現在地へ移った。本堂の完成は、元和7（1621）年であり、庫裏及び客殿もほぼ同時期に建築されたものと考えられている。

③ 総社宮



3-① 総社宮

本殿は、社伝によると、永禄5（1562）年に毛利元就が再建したものと伝えられるが、現存する棟札で最も古いものは、元和8（1622）年のもので、その詳細は不明である。現在の本殿は、明暦3（1657）年に森長継が再建したものである。本殿の形式は中山造である。

④ 鶴山八幡宮



4-① 鶴山八幡宮

現在の本殿は、寛文9（1669）年、森長継によって建立された。屋根はもともと檜皮葺であったが、明治15（1882）年に屋根が大破したとき修復資金が不足したため、やむを得ず栩葺に変更された。本殿の形式は中山造である。

⑤ 東照宮（現地蔵院）



5-① 東照宮（現地蔵院）

伯州往来沿いの八子地区にある地藏院は文化11（1814）年に建設された愛山東照宮の建物を昭和38（1963）年に移動させ、現在の本堂にしている。歴代藩主松平家の位牌が安置されており、境内には最後の津山藩主であった松平慶倫の神道式の廟所がある。

6 本蓮寺



6-① 本蓮寺

慶長年間に木知ヶ原村の本經寺の住職が、津山に末寺を立てたことに始まるとされる顕本法華宗寺院。明治に入り日容上人が赴任し、この地に津山顕本講を開く。

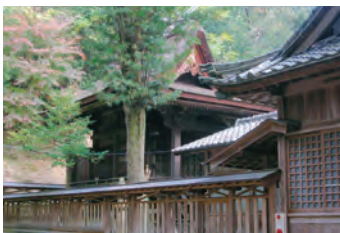
7 蓮光寺



7-① 蓮光寺

慶長 15 (1610) 年に開かれた日蓮宗の寺である。天保年間に火災により本堂を消失したが、嘉永元 (1848) 年に再建された。墓地には、森忠政が津山入封の際に、美濃から津山に移り津山城の御用瓦師を務めた赤染部氏の墓がある。

8 大隅神社



8-① 大隅神社

元は現在地より約 900 m 東方にあったが、森忠政が元和 6 (1620) 年に現在へ移した。旧地は、古大隅神社として今に残る。現本殿建立時の貞享 3 (1686) 年棟札をはじめ以降の修理ごとの棟札 6 枚を蔵する。

9 涅槃寺 (泰安寺)



9-① 涅槃寺 (泰安寺)

森家の旧領である美濃金山にあった涅槃寺が森入封のとき移ったもので、当初、涅槃寺と称していたが、元文 4 (1739) 年に泰安寺と改めた。松平氏の菩提所として初代藩主宣富以下の墓がある。

10 来迎寺 (成道寺)



10-① 来迎寺 (成道寺)

慶長 9 (1604) 年に森忠政により創建されたと伝える。現山門は、元鶴山小学校の表門を当時の津山町から購入し移築したものである。この門は、津山藩庁の門として造られたものと考えられ、建築年代は 19 世紀中ごろと考えられている。

11 宗永寺



11－① 宗永寺

臨済宗妙心寺派の末寺で、森長継の母の菩提寺として、明暦2（1656）年に建立された。「溪花院殿春嶽宗永大姉」の諱「宗永」を寺号とする。溪花院は森忠政の娘で、美濃金山に生まれ、津山の地で没している。

12 妙法寺



12－① 妙法寺

妙法寺は、もと鶴山柳の壇にあり、福聚山妙王院と称していた。慶長9（1604）年に森忠政は津山城築城に際して、妙王院を南新座に移し妙法寺とした。しかし、南新座が武家地として造成されることになり、元和3（1617）年に現在地に移転した日蓮宗の寺である。

13 本行寺



13－① 本行寺

本行寺は、創立は文明年間（1470年頃）に建立した法華宗の寺院にさかのぼる。森忠政入封後に南新座に移りその後現在地へ移転した。日蓮法華宗の堂宇では妙法寺本堂の五間堂が存在感を示すが、津山における三間堂の例として貴重である。

14 妙勝寺



14－① 妙勝寺

妙勝寺は、かつて院庄にあり金剛寺と称していたと伝える日蓮宗寺院。南北道路に面して、表門としての鐘楼門を開き、本堂が東面して配されている。表門は19世紀前期の建築と推定される。

15 本源寺



15－① 本源寺

本源寺は、津山市街西部に位置する臨済宗妙心寺派の寺院である。旧名は慶長12（1607）年に津山藩主森忠政が移転した龍雲寺で、森家の菩提寺である。天和3（1683）年の忠政の50回忌に当たり、忠政の院号に因み改称されたもので、境内中央に本堂が建ち、東に庫裏が並ぶ。

概要

祭りは神事であるとともに、氏子たちが総出で行う神輿神幸やだんじりの巡行等があり、神輿を担ぐもの、だんじりに乗るもの、祭りの警備をするもの、神輿等を修理するもの等、地域の多くの人達が関わってきた。さらに祭りは、イベントとしての側面を持っており、地域の人だけでなく多くの観光客が津山を訪れている。

ストーリー

津山城下において、江戸時代には旧暦の9月9日に大隅神社、その10日後に徳守神社が祭礼を行っていた（「町奉行日記」歴代町奉行の御用日記より）。戦後になり、祭礼に参加しやすいように10月の日曜日に祭日を変更した。昭和30（1955）年には、高野神社も同時期に祭りをを行うこととなり、これらの祭りをまとめて「津山まつり」と称するようになった。

祭りのあり方はその時々時代の背景などの影響を受け、変化しながら現在へ伝わっており、例えば、徳守神社の神輿の担ぎ手は、小田中村神田地区に属するものに限られていたが、少子高齢化の影響で、この伝統を維持することが困難となり、現在では担ぎ手は公募されている。だんじりについても、それ自体は、江戸初期の「練り物－仮装行列」に始まり、「屋臺・家臺－台上での俄等の踊り芸」となり、その後「神輿太鼓」、「壇尻」へと移り、現在の「だんじり」となったものである。これらの例からは、地域の人達が、祭りを続けられる工夫をし、変化を受け入れながら現在へと継承してきたことがわかる。

この祭りで主に徳守神社と大隅神社の神輿やだんじりが活動する場は、城東伝統的建造物群保存地区であったり、西寺町に代表される寺院や近代化遺産をはじめとした明治期以降の建造物が集まる、江戸時代から現在に至る地域の変遷を感じられる場所である。一方で高野神社の祭りの活動場所は、徳守・大隅神社の祭りとは異なり。自然と調和した風情を感じることができる。

津山まつりに出動するだんじりのうち、徳守神社の20臺と大隅神社の7臺は岡山県の重要有形民俗文化財に指定され、昭和になり製作された未指定のものを含めると約50臺になる。また、徳守神社と大隅神社の神輿は市の有形民俗文化財として指定されている。

このように、津山まつりは、時代に合わせて変化しながら続けられてきた。津山まつりではだんじり巡行ルートの大半は、城下町やその周辺地と重なり、そこは、江戸時代から現在に至るまで、多くの人々が生活をしてきた場所である。祭りの日には、歴史的な街並みや寺院、近代

城下町の活気がよみがえるまつり



※番号は構成文化財の写真番号

の建物が残る良好な環境の中を多くの人達が祭りに参加し、それを楽しむ。その時街並みが華やかな場所に替わる。津山まつりと祭りが行われる場所は、総合的に守るべき歴史文化である。

構成文化財

① 県重要有形民俗文化財 津山だんじり



1-① 津山だんじり

城下町津山では徳守神社の秋の祭礼行事として、新田村の氏子が神輿を担ぎ、戸川町は猿田彦命に擬して先駆けを務め、その他は各町ごとに趣向をこらした「練物」を出して供奉するのが慶長以後の慣例であり、徳守神社が城下町の総鎮守として再興されて以来の行事であったことがわかっている。現在、10月の祭礼は町の活性化や観光開発の意味をこめたイベント＝「津山まつり」として、個々の神社・町内だけでなく行政や商工会議所も協力する形で実施されており、文化財指定の「だんじり」以外に新たに作られた「かざり山車」も出動するなど、伝統的な文化の保存と現代的なイベントの実施とうまく両立させるべく、努力が重ねられている。

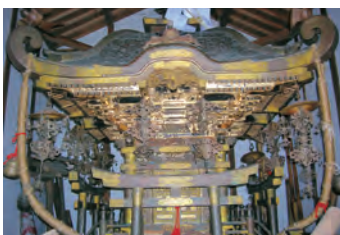
② 市重要文化財 徳守神社神輿



2-① 徳守神社神輿

『徳守神社誌』によれば、徳守神社の初代神輿は、寛文4（1664）年に新調された黒塗の神輿であった。その後、明和2（1765）年に修理を行ったが老朽化したため、文化8（1811）年に金塗の2代目の神輿を新調した。その後、明治31（1898）年にも修理し、現在に至る。

③ 市重要文化財 大隅神社神輿



3-① 大隅神社神輿

本神輿は、天保13（1842）年に製作されたものである。以後、大掛かりな改修記録は残されていない。重量は600kgもあるため、嘉永年間（1848～1853）の担ぎ手は28名であったが、現在では50名前後で交代で担いでいる。

コラム

高野神社の津山まつりへの参加

江戸時代、津山城下において旧9月9日に大隅神社、その10日後に徳守神社が例祭を行っていたことが「町奉行日記」（愛山文庫 歴代町奉行の御用日記）を始め様々な資料に記載されている。戦後になり祭礼参加者が都合をつけやすい10月の日曜日に祭日を変更した。昭和30(1955)年には美作二宮である高野神社も同時期に祭りを行うこととなり、この三社の祭りを「津山まつり」と称するようになった。当初、わずか3町内で始まった高野神社のだんじりは次第に数を増し、現在各町内の12臺が毎年出動している。

高野神社の祭りは、城下町の大隅神社や徳守神社の祭りとは異なり、自然と調和した風情を感じることができるものである。

概要

津山を経由する山陰山陽連絡鉄道計画は明治 22 (1889) 年に始まり、明治 25 (1892) 年に公布された「鉄道敷設法」に条文化された。津山に陸蒸気^{おかじょうき}がやってきたのは明治 31 (1898) 年で、陰陽連絡鉄道の結節点になったのは昭和 7 (1932) 年、東西南北鉄道交通の要衝となったのは昭和 11 (1936) 年であった。その後も新駅開業に向けた運動が起こる等、美作には鉄道に賭けた人々の夢とドラマが溢れている。鉄道記念物・旧津山扇形機関車庫と転車台をはじめとする津山圏内の鉄道建造物等は、継承すべき近代化の証人であり文化遺産である。

なお、ここでのストーリーは、主に市内を中心とした記述としているが、鉄道はその性格上、市内を限定としたストーリーとすることが難しいことや、ストーリーの理解を更に深めることができるよう、資料編に改めて全編を掲載した。

ストーリー

■津山往来と中国鉄道ルート

鉄道黎明期の明治時代初期から発展期の明治時代後期まで、敷設ルートとしてまず考えられたのが江戸時代までに整備されてきた往来沿いであった。岡山県初の鉄道として明治 24 (1891) 年 3 月 18 日に開業した山陽鉄道三石・岡山間 41km もほぼ山陽道と並走した。それでは明治 31 (1898) 年 12 月 21 日、二番目に開業した中国鉄道岡山市・津山（現在の津山口）間 56.2km の場合はどうであろう。中国鉄道会社は当初、山陽鉄道岡山駅に乗降場を併設する計画であった。ところが、山陽鉄道会社との折衝が物別れに終わったことから、岡山駅からおおよそ 500m 離れた、現在の岡山気動車区の場所に岡山市駅を設けた。もっとも、山陽鉄道岡山駅が江戸時代までに形づくられていた市街地から離れたところに置かれていたため、岡山市駅も津山往来の起点とされる「神屋町と栄町の間の石橋」から 1 km ほどの距離となった。

津山往来は「神屋町と栄町の間の石橋」から北に向かい、半田山から栢谷、吉宗からはおおむね国道 53 号と同じルートで津山を目指している。それでは線路はどこに敷かれたのであろう。中国鉄道会社主任技師・小川資源は、岡山市・玉柏・野々口を津山往来から大きく外れたルート、野々口・福渡間はほぼ津山往来沿いとしている。それは半田山越え、辛香峠越えを避けたためであると考えられる。もっとも玉柏・野々口間には管掛から手立隧道に至る難工事箇所があった。しかし工事の難易度、勾配や曲線などを検討した結果、玉柏経由に軍配を挙げたものと思われる。岡山市・津山間の急勾配は玉柏・野々口間の手立隧道前後、金川・建部間の箕地隧道前後、福渡・

神目間の第1 誕生寺川橋梁と第4 誕生寺川橋梁の間の25%である。金川・福渡間を津山往来ルートとし、箕地隧道の掘削を決めたのは、敷設距離の短縮と旭川沿い狭隘地への敷設を回避したためであると考えられる。福渡の町からは津山往来を外れて旭川沿いを北上し、高浜から誕生寺川に橋梁をわたしながら半径300mで蛇行をつづけ、石引付近で山越えを終えた津山往来と合流する。この迂回同様の勾配忌避は亀甲駅の弓削方と亀甲・佐良山間にもあるが、岡山市街地・野々口間以外のルートはおおむね津山往来に沿っている。

■出雲往来と姫新線ルート、因幡道と因美線ルート

姫新線姫路・新見間158.1kmは大正12(1923)年から昭和11(1936)年にかけて順次開業していった。線路は万能峠を貫く万ノ峠隧道608.5mで兵庫県から岡山県に入り、トンネル西踏切で峠を越えてきた出雲往来と交差する。『新編 作東町の歴史』には、森藩が出雲往来に列植した松が、播美鉄道の敷設工事で全て切り倒されたと記されている。播美鉄道は姫新ルートの一部を計画していた未成線である。当時、作東地区の松は既に少なくなっていたが、竹田の栗田から万能峠の頂までが残っていたという。線路はトンネル西踏切から出雲往来に沿って土居宿、そして美作江見駅に至るが、美作江見・林野間では出雲往来を大きく南に逸れている。山陰山陽連絡鉄道敷設運動の起こった明治22(1889)年から、播州・津山間の鉄道は倉敷経由で計画されてきた。それは勾配を避けることと、湯郷温泉へのアクセスを検討したからであると思われる。林野駅からの線路は勝間田付近から再び出雲往来と並走しながら東津山駅に入る。

出雲往来が津山城下を通過したのに対し、津山駅は吉井川の南側に置かれている。鉄道が吉井川をわたって城下に入らなかったのは、住民が橋梁建設に異を唱えたからである。中国鉄道津山駅の位置をめぐる人々は、明治25(1892)年と明治26(1893)年の水害を教訓に橋梁建設に反対した。中国鉄道会社ばかりでなく、未成に終わった津山軽便鉄道会社や西美鉄道会社も城下への駅建設を計画したが、線路が吉井川をわたることはなかった。もっとも家並みの続く城下に、駅や線路用地を確保するのは容易でなかったはずである。鉄道忌避の話は全国各地で語り継がれており、岡山県もその例外ではない。山陽鉄道では赤穂、三石、和気、熊山、西大寺、玉島、中国鉄道岡山・湛井間では総社、伯備南線倉敷・新見間では総社と高梁にあるが、いずれも信憑性を欠くものである。

津山・院庄間の線路は、第1 吉井川橋梁の西で出雲往来に再接近する。坪井駅の西で一時離れるが、美作追分駅まではほぼ並走する。ところが美作追分・久世間は出雲往来を大きく南に外れ、落合を迂回している。出雲往来ルートには急勾配とトンネル工事が待ち構えていたが、落合は松山往来、大山道、備前往来、月田街道、木山街道が分岐する交通の要衝であった。落

合経由については『落合町史』に詳しいが、敷設距離は7 km から 15km に倍増した。美作落合駅から北に向かった線路は、久世駅の東およそ 1.5km 地点で出雲往来に近づき、中国勝山駅の西約 2 km まで並走する。そこから出雲往来は美甘、新庄から四十曲峠を越えて根雨に至るが、線路は新見に向かって西に進む。明治 22 (1889) 年に起こった山陰山陽連絡鉄道姫路・津山・米子間や、未成に終わった中国鉄道津山・米子間はどちらも出雲往来ルートであった。

明治政府の鉄道会議は、粘着運転で美甘・新庄・四十曲峠間を越えるのは不可能で、信越旧線横川・軽井沢間で採用したアプト式に頼らざるを得ないと判断した。鉄道黎明期における鉄道工事の定石は、トンネルは掘らない、掘らざるを得ない時は登れるところまで登って最短距離で掘る。高価な輸入橋桁はできるだけ架けない。架けざるを得ない時は川に対して直角に最短距離で架けるであった。姫新線中国勝山・新見間の工事が始まったのは、その定石が守られていた昭和 3 (1928) 年 2 月 15 日であった。

大正 3 (1914) 年 5 月、鉄道院告示第 32 号で軽便鉄道智頭線鳥取・智頭間が通達された。因美線鳥取・智頭間 31.9km の敷設工事は大正 5 (1916) 年 12 月 1 日、鳥取側で起工し、大正 12 (1923) 年 6 月 5 日開業した。大正 7 (1918) 年の第 41 議会では鳥取・津山間 73.4km が承認されたが、岡山県側の工事が始まったのは大正 15 (1926) 年 2 月 6 日であった。因美線の岡山県内ルートは概ね因幡道(加茂往来)に沿って計画された。

■大江太郎と日下輝道

本州の鉄道はイギリス、北海道はアメリカ、九州はドイツの技術で敷設された。軌間の国際規格は新幹線の 4 呎 5 吋 1 / 2 (1,435mm) であるが、明治政府は 3 呎 6 吋 (1,067mm) を採用した。それはアジアの国々で植民地政策を展開してきたイギリスのアドバイスを素直に受け入れたからである。狭軌鉄道に決定した大隈重信や伊藤博文は、軌間の持つ意味を理解していなかったのである。明治政府は近代国家建設に向けお雇い外国人を招聘した。鉄道敷設のため日本を訪れた技師にはエドモンド・モレル、ジョン・ダイアック、トーマス・シャービントン、ウォルター・ページ、リチャード・ボイルらがいたが、明治 12 (1879) 年 4 月 14 日、エドモンド・グレゴリー・ホルサムは新橋鉄道局の落合丑松、平野平左衛門、山下熊吉を、8 月 7 日には神戸鉄道局の日下輝道、平松好太、岡野熊吉を機関方に任命した。初の日本人機関士となった 6 人の中の一人、日下輝道は嘉永 7 (1854) 年 4 月 5 日、苫田郡津山町生まれの士族である。明治 4 (1871) 年、藩命により江戸浜町の箕作秋坪塾に学んでいた。しかし廃藩置県のため一時帰国し、再び東京を目指した明治 6 (1873) 年、神戸付近で進められていた敷設工事を見て鉄道に興味を抱き、同郷の先輩で神戸機関庫主任・大江太郎の紹介で同年 10 月、神戸機関区に

汽車組立夫として採用された。その後は明治 26 (1893) 年の鉄道技手から沼津機関庫主任、日露戦争では第五班長兼車両長として満州に赴任し、帰国後は鉄道技師、新橋機関庫主任などを歴任し大正 13 (1924) 年 1 月 13 日、70 年の生涯を閉じた。鉄道黎明期の津山は、大江と日下、二人の鉄道員を輩出した。

■美作の鉄道計画

明治 21 (1888) 年 12 月 23 日、山陽鉄道神戸・姫路間が開業し、馬関（下関）に向けた線路西進への期待が高まった。明治 22 (1889) 年 5 月 29 日付山陽新報の「鉄道布設計画」は、姫路と三日月地方の人士が山陽鉄道の支線を播州から津山に向けて敷設し、美作、因幡、伯耆の貨物を播州に輸送しようと目論んでいると報じている。それは、岡山に鉄道が延びれば、道路事情のよい岡山・津山間に山陰からの物流を奪われ、姫路地方での鉄道利用が減少するのではないかという懸念からの発想であった。山陰新聞や鳥取新聞も相次いで同じ内容を記事にしたが、敷設ルートとされた久崎・英田・津山間はほぼ出雲往来に沿うものであったと思われる。山陽新報は 6 月 22 日付「備中国浅口郡玉島通信」で、浅口郡の板谷九郎らが玉島港・米子港間の鉄道敷設に向けた会合を数回持ったと伝えている。岡山県では明治 22 (1889) 年、山陰山陽連絡鉄道敷設運動が急激な盛り上がりを見せたのであるが、その背景には岡山に山陽鉄道工事の槌音が響き始め、鳥取県の境からは米子を経て日本海沿いを東進する山陰鉄道が計画されていたことがある。播州・津山間に山陽鉄道の支線、伯耆からは山陰鉄道の支線を山陽に向けて敷設する計画がなされたのである。二つの支線が連絡する津山は敷設運動の台風の目となった。

小学校の教諭や校長らが集まり囲碁や浮世話、詩文など風流を楽しんでいた「倶楽會」は、会員の増加とともに政治談の盛んな政治クラブ「津山淡水会」となった。津山淡水会は明治 22 (1889) 年 7 月、山陰山陽連絡鉄道についての理事会を開き、山陽鉄道の支線と山陰鉄道の支線の調整役を担うことを決議した。おおまかな経緯はこうである。東京で土木業を営む岡山出身の篠野憲令はたびたび、英田郡長・池田長準に鉄道敷設を提案してきた。池田は東北條郡長・水野清や英田郡内の有志者に諮り、津山淡水会に協力を求めたことから事態は大きく動いた。山陽鉄道支線姫路・津山間およそ 21 里 (84km) の敷設費 200 万円は篠野が東京で株を売って賄い、山陰鉄道支線境・津山間約 20 里 (81km) 300 万円の株式は伯耆、雲州、倉吉の有志者が受け持つことになった。津山淡水会の役割は二つの支線の調整と、美作での株式販売であった。

その運動で中心的役割を演じたと思われるのが勝南郡池ヶ原の大岡熊次郎である。大岡は同年 7 月 25 日、英田郡長、勝田郡長らと姫路・米子間の鉄道敷設会合を開いた。9 月には津山市二階町の矢吹貫一別邸に事務所を置き、美作 12 郡の代表 30 名が連署した仮免許申請書を提出

した。また根雨や米子、境で鉄道敷設に向けた集会を持ち、伯耆の有志者らとの連携を深めた。内閣鉄道局は同年秋、陰陽鉄道会社の申請ルートを実地測量するため、帝国工業の技師・小田川^{まさゆき}全之を津山に派遣した。小田川は姫路・津山ルート、津山・四十曲峠・根雨・米子ルート、津山・人形峠・倉吉・米子ルート、伯備線ルート、津山線ルートの実地測量を行ったが、陰陽鉄道会社の申請は却下された。しかしその後の山陰山陽連絡鉄道運動には山陽側の始点を龍野、和気、岡山、倉敷などとする動きが現れたり、矢掛・吹屋・新見・米子間ルートが加わるなどしたため熾烈さを増した。明治23(1890)年には鳥取県議会議長ら、明治24(1891)年には岡山県議会議長や鳥取県議会議員ら、倉吉の武信克三らが岡山・津山・倉吉・米子間を請願するなどしたが、いずれも免許状下付には至らなかった。岡山県南の鉄道計画は明治29(1896)年に免許状を下付された児島鉄道倉敷・味野間をして^{こうし}嚆矢とするが、作州の計画と運動は県南のそれを大きく凌駕するものであった。小田川はその後、群馬県職員から古河鋳業に転じ、足尾銅山鋳山長や足尾鉄道役員などを歴任し、鋳毒事件の解決にも奔走した。アメリカから持ち帰った「安全専一」という考えを「安全第一」として定着させたのも小田川である。

■中国鉄道

第2次鉄道熱で誕生したのが中国鉄道岡山市・津山(津山口)間である。中国鉄道取締役社長に就任した杉山岩三郎は明治26(1893)年岡山を起点とする山陰山陽連絡鉄道と岡山の市街鉄道、明治27(1894)年吉備鉄道石井・浅尾間、明治28(1895)年中国鉄道岡山・境間、明治29(1896)年岡山鉄道岡山・宇野間、明治30(1897)年山陰鉄道倉吉・^{やばせ}八橋・米子・境間、明治36(1903)年山田鉄道三重県山田・東見付間、明治43(1910)年中国鉄道原古才・稲荷間と美作軽便鉄道津山・江見間、明治44(1911)年福島軽便鉄道鹿田・福島間、大正12(1923)年中備電気軌道岡山・倉敷間と早島・天城間などを計画した。中国鉄道会社が仮免許申請のため明治26(1893)年7月に招聘した技師は杉山^{しゅうきち}輯吉であったと思われ、免許状下付後の岡山・米子間実施設計を担当したのは小川資源であった。信越旧線横川・軽井沢間、日本鉄道、京都鉄道、西成鉄道などでの実績を買われた小川は、中国鉄道では技師長から専務取締役を歴任し、官名を帯びて東亜の鉄道研究に携わった。岡山市・津山間の敷設工事には大倉^{くめま}桑馬や菱川吉衛らが参加した。大倉は大成建設の前身となる大倉組の番頭であった。岡山の実業家・菱川は明治10(1877)年、菱川組を立ち上げた。明治22(1889)年にはイギリス人ジョン・モリスに指導を受け、岡山・広島間に電線を架設した。鉄道事業では中国鉄道の発起人や債権者に名を連ねた。敷設工事では中国鉄道のほか山陽鉄道、西大寺軌道、山陰線、豊肥線、肥薩線、久大線、日豊線、高森線、岩徳線、三江線、伯備線、四国や朝鮮半島での敷設工事、門司港駅の施工を

請け負った。また岡山臨港鉄道や稲荷山鋼索鉄道を計画し、岡山電気軌道第3代社長も歴任した。しかし昭和3（1928）年の吉衛逝去の後、菱川組は一代限りで解散・廃業となった。

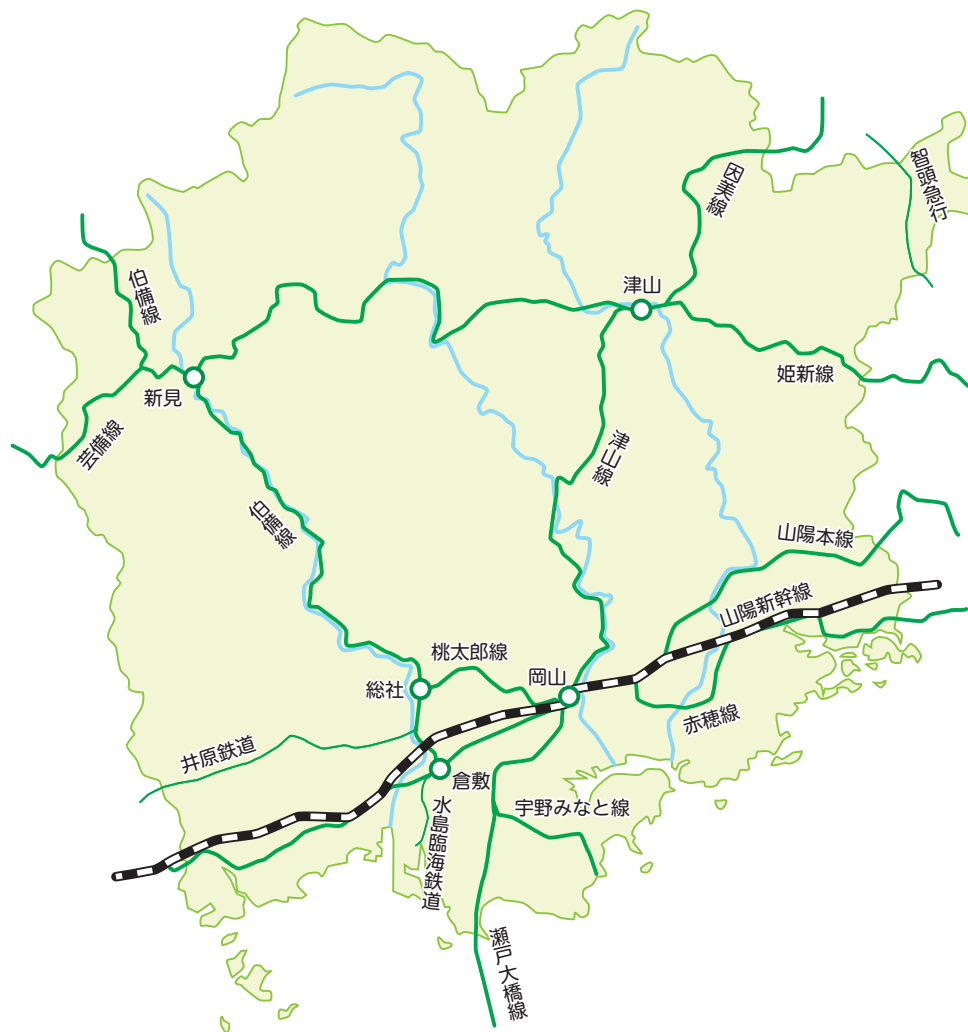
中国鉄道会社にイギリス製の橋桁を納入したのは、磯野計が興した磯野商会である。磯野は安政5（1858）年、津山町椿高下に津山松平藩士・磯野湊の二男として生まれ、神戸洋学校で箕作麟祥、三又学舎では箕作秋坪に学び、大学南校に進んだ。東京大学法学部を卒業し明治13（1880）年、三菱給費生としてイギリスに出帆、ノリス・アンド・ジョイナー商会で商業実務と複式簿記を修得した。帰国後は郵船汽船三菱会社などに勤務したが明治18（1885）年、横浜で船舶納入業を始め明治19（1886）年、明治屋を創業した。明治21（1888）年トーマス・グラバーの推薦でジャパン・ブルワリーのキリンビール総代理店、明治24（1891）年には明治火災保険初の代理店になった。明治27（1894）年になると明治屋輸出入店を開設し、明治29（1896）年5月、北越鉄道会社のレール入札に成功し、1897（明治30）年、グラスゴーにH. ISONO & CO.、東京に磯野商会を設立した。磯野は同年2月14日、肺炎の一種、ハイキン症のため39歳で逝去したが、津山線の作三〇年式上路プレートガーダは磯野商会が輸入したものである。

■ 姫新線と因美線

明治22（1889）年の山陰山陽連絡鉄道運動から鉄道事業に参加し、中国鉄道会社で専務取締役を務めた立石岐は、作備線津山・院庄間の敷設用地に自邸前の土地を提供した。大正12（1923）年8月21日の作備線津山口・津山・美作追分間開業とともに営業を始めた津山駅本屋を、山陽新報は「現在縣下何ずれの驛の追従をも許さない理想的最新式の大驛」「開け行く大津山町の将来に相應しい」と賞した。津山駅構内には岡山機関庫津山分庫が完成し、大正13（1924）年には津山機関庫に改称された。作備線津山口・津山・新見間が全線開業した昭和5（1930）年12月11日には津山機関庫に60ft 転車台が置かれ、姫津線姫路・東津山間が全線開業した昭和11（1936）年4月8日には60ft 転車台を取り囲むように鉄筋コンクリート造17線の扇形機関車庫が竣工した。同年10月1日、姫津線姫路・東津山間、因美線東津山・津山間、作備線津山・新見間が姫新線姫路・新見間とされた。昭和29（1954）年10月1日には橿原駅、昭和33（1958）年4月1日古見駅、昭和38（1963）年10月1日西勝間田駅が開業したが、西勝間田駅は大岡熊次郎の屋敷があった池ヶ原の最寄り駅である。

因美線は「鉄道敷設法」に謳われた山陰山陽連絡東方線姫路・鳥取・境間の一部であるが、敷設工事が始まったのは軽便鉄道智頭線鳥取・智頭間が承認された大正3（1914）年5月1日であった。大正7（1918）年には智頭・津山間の延伸が認められ、大正12（1923）年6月5日、

因美北線鳥取・智頭間が開業した。ところが因美南線津山・智頭間の着工は大正 15 (1926) 年 2 月 6 日にずれ込んだ。その原因は比較線の出現にあった。大正 7 (1918) 年 11 月頃、智頭・坂根・佐用・平福・姫路間、大正 10 (1921) 年 9 月頃、智頭・那岐・豊並・勝田・古吉野・植月・広野・高野・津山間、大正 13 (1924) 年には智頭・勝間田間が現れた。争奪戦は代議士への事情聴取に発展し、新聞が報じるところとなった。鉄道省は静観せざるを得なかったが大正 14 (1925) 年 12 月、当初計画の加茂経由に決断した。昭和 7 (1932) 年 7 月 1 日智頭・美作河井間が開業し、因美線鳥取・津山間全線が開業した。昭和 16 (1941) 年美作河井駅構内に雪掻き機用転車台が設置され、昭和 38 (1963) 年 4 月 1 日には三浦駅が開業した。津山線、姫新線、因美線の列車が全て津山駅発着となったのは、中国鉄道が国有化された昭和 19 (1944) 年 6 月 1 日である。



岡山県内の鉄道網

① 津山線

① クリーブランドブリッジ社製作三〇年式上路プレートガーダ



1-① 第1佐良川橋梁

第1佐良川橋梁、第2佐良川橋梁、第21架道橋（亀甲・佐良山間）、谷川橋梁（佐良山・津山口間）：イギリス人技師ポーナルの設計により明治30（1897）年11月17日、鉄作乙第1075号達で通達された作三〇年式上路プレートガーダ。イギリス、ダーリントンのクリーブランドブリッジ社が明治30（1897）年に製造し、磯野商会在中国鉄道会社に納入した。



1-② 第2佐良川橋梁



1-③ 第21架道橋



1-④ 谷川橋梁

② ドーマンロング社製Iビーム

第2湯ノ谷開渠、第1河原開渠、第2河原開渠（佐良山・津山口間）：鉄道作業局技師・古川晴一が明治28（1895）年に設計し、明治30（1897）年8月25日「作三〇年式」として通達されたIビーム。イギリス、ミドルズブラのドーマンロング社製。



2-① 第2湯ノ谷開渠



2-② 第1河原開渠



2-③ 第2河原開渠

③ 煉瓦造橋台

第21架道橋（亀甲・佐良山間）、第8避溢橋、第1河原開渠（佐良山・津山口間）：橋台をイギリス積み煉瓦、最上部に花崗岩の床石を置く。津山往來を跨ぐ第21架道橋の橋台には隅石が付けられている。



3-① 第21架道橋



3-② 第8避溢橋



3-③ 第1河原開渠

4 旧津山駅（現在の津山口駅）



4-① 旧津山駅

明治 31 (1898) 年 12 月 21 日中国鉄道津山駅として開業し、作備線延伸に伴い大正 12 (1923) 年 8 月 1 日津山口駅になった。かつては鋳屋根の駅本屋に等級別待合所と改札口があり、広い駅構内には矩形機関車庫と転車台、給水・給炭施設などが置かれていた。駅前には運送会社などが軒を連ね、周辺には木材市場もあった。その姿は西美鉄道資料、江見写真館が所蔵するガラス乾板、塩山家が所蔵する古写真から徐々に明らかになってきた。開業時の姿をとどめるのは対向ホームで、擁壁は布積み花崗岩。昭和 30 年代に行われたかさ上げ跡はなく、建設当初の高さのままである。

5 用地界標

中国鉄道会社の社章^中が彫られた花崗岩の境界杭群。旧津山駅の最北端にも 2 箇所残る。津山線、吉備線、稲荷山線跡にも現存する中国鉄道会社の用地界標は、山陽鉄道会社の用地界標に並ぶ貴重な鉄道文化財。京都鉄道博物館も所蔵する。



5-① 第1 河原開渠付近



5-② 第2 河原開渠付近



5-③ 津山口駅構内

2 姫新線

1 東津山駅



1-① 東津山駅

昭和 3 (1928) 年 3 月 15 日、因美南線津山・美作加茂間とともに開業したが昭和 11 (1936) 年 10 月 10 日、津山・東津山間は姫新線に編入された。駅構内にはかつて信号取扱所と木造跨線橋があった。駅舎の駅務室は取り壊され、待合のみが現存する。東津山駅東方の請願踏切東側で姫新線と因美線が分岐する。

2 大溝川橋梁



2-① 大溝川橋梁

因美南線第 1 工区津山・高野間で工事され、大正 15 (1926) 年 2 月 6 日着手、昭和 2 (1927) 年 8 月 1 日竣工。橋桁の作三〇年式上路プレートガーダは転用されたもの（東津山・津山間）。

③ 吉井川の橋梁

吉井川橋梁（東津山・津山間）は因美南線第1工区津山・高野間で工事され大正15（1926）年2月6日着手、昭和2（1927）年8月1日竣工。第1吉井川橋梁（津山・院庄間）と第2吉井川橋梁（院庄・美作千代間）は作備線第1工区で工事され大正11（1922）年7月3日竣工。現在は姫新線の橋梁ではあるが、因美線と作備線、別々の路線として工事されたため橋梁名に連続性がない。第2吉井川橋梁は西美鉄道会社が一部工事をした後、鉄道院に買収された。



3-① 吉井川橋梁



3-② 第1吉井川橋梁



3-③ 第2吉井川橋梁

④ 津山駅

作備線津山口・美作追分間が開業した大正12（1923）年8月21日開業。ドーマーウィンドーとハーフトインバーを特徴とした駅本屋を山陽新報は「現在縣下何すれの驛の追従をも許さない理想的最新式の大驛」「開け行く大津山町の将来に相應しい」と賞したが、開業から43日後に焼失し、翌年復元された。建物資産標の日付は、駅本屋が「大正12年6月」、1番・2番ホームの旅客上家5号は「大正11年12月」、3番・4番ホームは「昭和3年3月」。開業から使われつづけている地下通路には、第2次世界大戦の空襲警報発令時、駅職員が利用客を避難させたという。駅本屋の中には地下通路の旧階段が現存し、古レールが再利用されている諸舎1号（建物資産標は昭和31年3月）と1番・2番ホームの旅客上家8号（同昭和36年3月）のうち、旅客上家8号にはイギリスのボルコウ・ボーン社が明治30（1897）年、中国鉄道会社に向けて製造したレールが使われている。



4-① 全景



4-② 駅本屋



4-③ ホーム

⑤ 旧津山扇形機関車庫と転車台



5-① 旧津山扇形機関車庫と転車台

作備線津山口・津山・美作追分間が開業した大正12（1923）年、まず平面スイッチバックの津山駅構内に矩形機関車庫が完成した。次に作備線が全線開業した昭和5（1930）年、矩形機関車庫の横広場に60ft下路式転車台図面番号G2-1が設置された。さらに姫津線が全線開業した昭和11（1936）年、転車台を取り巻くように鉄筋コンクリート造スラブ構造17線の扇形機関車庫が竣工し、矩形機関車庫は解体された。扇形機関車庫は昭和7（1932）年に通達された「扇形機関車庫設計標準図」丙図に相当し、京都鉄道博物館の梅小路機関車に次ぐ現存二番目の規模。扇形機関車庫と転車台は平成30（2018）年10月14日、登録鉄道記念

物から準鉄道記念物を通り越して鉄道記念物に指定された。現在は内燃動車 13 両を展示する津山まなびの鉄道館の主要施設。

6 立石踏切



6-① 立石踏切

立石岐は、明治 22 (1889) 年に津山が台風の目となった山陰山陽連絡鉄道運動で山陰側の有志者との調整役を務め、国会議員としては山陰山陽連絡鉄道実現に向けたはたらきかけをつづけるなど、「鉄道敷設法」に山陰山陽連絡線が謳われる基礎を築いた。専務取締役を務めた中国鉄道会社が米子延伸を断念したことを悔やみ、作備線の敷設が決まった時鉄道省に、自宅前の土地を線路用地として提供した。踏切や駅の名前には、土地や付近の主要な建造物の名前をあてるのが定石とされていたが、立石家住宅前の踏切は「立石踏切」と命名された。(津山・院庄間)。

7 院庄駅



7-① 院庄駅

大正 12 (1923) 年 8 月 21 日開業。建物財産標は「本屋 1 号大正 12 年 6 月」だが、駅務室は取り壊され待合のみが現存する。対向ホームや敷地の広さが、木材の輸送基地として賑わっていた頃の雰囲気を今に伝えている。プラットホームでは、昭和 30 年代に行われたかさ上げ規模を知ることができる。

8 美作線千代駅

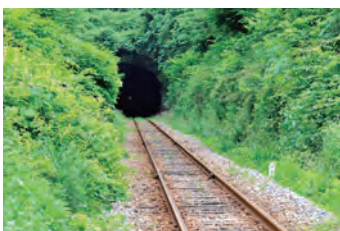


8-① 美作千代駅

大正 12 (1923) 年 8 月 21 日開業。建物財産標は「本屋 1 号大正 12 年 6 月」。木造駅本屋と単式ホームが開業当時のまま残っている。姫新線美作土居駅と美作千代駅には官舎であった建物も残っている。

③ 因美線

1 物見隧道



1-① 美作河井方

因美南線第 4・第 5 工区で工事され昭和 3 (1928) 年 10 月 22 日着手、昭和 6 (1931) 年 9 月 21 日竣工。道床をコンクリート、軌道中央に排水溝を設けた当時の最新設計。延長 3.77km は竣工当時、土讃線財田・坪尻間の猪ノ鼻隧道 3.845km に次ぐ長さであった。(那岐・美作河井間)。

② 擁壁



2-① 那岐・美作河井間



2-② 美作加茂・三浦間

因美南線第4工区美作河井・物見隧道間は昭和3(1928)年10月22日着手、昭和6(1931)年7月12日竣工。半径300mカーブ、25%勾配区間の石積み擁壁は2回、線路中心点移動を強いられた。(那岐・美作河井間)。加茂川沿いに積まれた花崗岩の擁壁

は、因美南線第3工区美作加茂・美作河井間で工事され、昭和3(1928)年12月28日着手、昭和5(1930)年11月15日竣工(美作加茂・三浦間)。

③ 美作河井駅



3-① 美作河井駅

昭和6(1931)年9月12日開業。木造の駅本屋、便所、待合所などが竣工時の姿で残る。建物財産標の日付は「昭和6年9月30日」。駅本屋は昭和5(1930)年に通達された「小停車場本屋標準図」第2号型。スチールトン社が大正12(1923)年に製造したレールが現役。40ft 転車台、給水塔跡、珪石を積み出したプラットホームの跡、遷移転轍機があり、ホームには山から引いた水飲み場の跡がある。

④ 美作河井駅 40ft 上路転車台



4-① 美作河井駅 40ft 転車台

明治時代初期の鉄道黎明期に輸入された転車台桁で、明治5(1872)年に開業した新橋駅と横浜駅に設置された桁と同規格。40ft 上路転車台桁は津軽鉄道津軽中里駅と津軽五所川原駅、博物館明治村東京駅にも現存するが、最も原型をとどめているのが美作河井駅の桁。大正8(1919)年用瀬駅、大正11(1922)年智頭駅、つづいて昭和16(1941)年美作河井駅に移転されたと思われるが、用瀬駅以前の履歴は不明。美作河井転向所では、

雪掻き車の方向転換に使われていた。

⑤ 加茂川の橋梁

松ぼうき(「山」の下に「川」と書く)橋梁、第2加茂川橋梁(美作河井・知和間)、太郎淵橋梁、第1加茂川橋梁(知和・美作加茂間)は、因美南線第3工区美作加茂・美作河井間で工事され昭和3(1928)年12月28日着手、昭和5(1930)年11月15日竣工。松ぼうき橋梁(美作河井・知和間)の橋台面長間94.83m、高さ20mは因美線最大。加茂川橋梁(美作滝尾・高野間)は、因美南線第2工区高野・美作加茂間で工事され大正15(1926)年4月1日着手、昭和2(1927)年9月30日竣工。5橋梁は加茂川に架けられたプレートガーダ橋であるが、架設場所により名称が異なっている。



5-① 加茂川橋梁



5-② 松ぼうき橋梁



5-③ 第2加茂川橋梁



5-④ 太郎洲橋梁



5-⑤ 第1加茂川橋梁

6 築堤



6-① 築堤

因美南線第3工区美作加茂・美作河井間で工事され昭和3（1928）年12月28日着手、昭和5（1930）年11月15日竣工。物見隧道から知和駅の美作河井駅方までは連続25%勾配。そのうちの大ケ原隧道・知和駅美作河井駅方間およそ2.5kmが大築堤。中国山地を越える鉄道を象徴するような鉄道風景（美作河井・知和間）。

7 知和駅



7-① 知和駅

昭和6（1931）年9月12日開業。木造の駅本屋と待合が竣工時の姿で残る。建物財産標の日付は「昭和6年9月30日」。単式ホームだが側線跡がある。駅本屋は「小停車場本屋標準図」第1号型。

8 美作加茂駅



8-① 美作加茂駅

昭和3（1928）年3月15日開業。駅本屋は平成15（2003）年に建て直されたが、貨物ホーム跡と対向ホームの待合が往時の姿で残る。

9 津川橋梁



9-① 津川橋梁

因美南線第2工区高野・美作加茂間で工事され大正15(1926)年4月1日着手、昭和2(1927)年9月30日竣工。昭和9(1934)年には室戸台風の被害を受けたが、径間12.85m 2連の作三〇年式上路プレートガーダのまま復興された(美作加茂・三浦間)。

10 三浦駅

昭和38(1963)年4月1日開業。岡山県内の因美線唯一の新設駅。プラットホームは古レールとコンクリートで造られた二つの顔を持つ。駅本屋はなく、「昭和38年3月28日」付建物財産標の貼られた待合所1号がある。駅前には三浦町内会が昭和38(1963)年3月28日に建立した「三浦駅建設記念碑」がある。



10-① プラットホーム 01



10-② プラットホーム 02



10-③ 一致団結大願成就碑

11 美作滝尾駅



11-① 駅本屋



11-② 貨物上家

昭和3(1928)年3月15日開業。木造の駅本屋は「小停車場本屋標準図」第3号型。「美作滝尾駅貨物上家1号 昭和3年3月30日」と書かれた建物財産標の貼られた貨物上家1号は岡山県内に唯一現存する貨物上屋。平成7(1995)年に公開された「男は

つらいよ 寅次郎紅の花」冒頭部分のロケ地に選ばれた。平成20(2008)年10月20日、造形の規範となっているものとして登録有形文化財に登録された。

12 高野駅



12-① 高野駅

昭和3(1928)年3月15日開業。木造の駅本屋は「小停車場本屋標準図」第3号型。建物財産標の日付は「昭和3年3月30日」。対向ホームや側線などが残る。プラットホームの擁壁上部には津山駅と同じタイルが貼られている。

④ 津山市内の構成文化財

① 大岡家屋敷跡



1－① 大岡家屋敷跡

明治 22(1889)年に起こった山陰山陽連絡鉄道運動で中心的役割を演じ、明治 29 (1896) 年の陰陽中央鉄道、和津鉄道、作東鉄道などを計画した大岡熊治郎の屋敷跡。昭和 33 (1958) 年に取り壊されたが、倉庫 1 棟が半壊の状態に残っている。津山市池ヶ原。

② 大岡家墓所



2－① 大岡家墓所

大正 9 (1920) 年 6 月 1 日に逝去した大岡熊治郎ら大岡家と岡家一族が眠る墓所。津山市池ヶ原。

③ 磯野氏先祖累代之墓



3－① 磯野氏先祖累代之墓

明治 26 (1893) 年、磯野計が建立した磯野家累代之墓。大信寺。津山市林田。

④ 鉄道開通 70 年記念碑

昭和 17 (1942) 年 10 月 14 日「鉄道記念日」に設置された鉄道開通 70 周年記念碑。美作河井駅、美作加茂駅、美作滝尾駅、東津山駅前にある。東津山駅前の碑は元鉄道大臣・小川郷太郎が揮毫したもの。



4－① 美作河井駅



4－② 美作加茂駅



4－③ 美作滝尾駅



4－④ 東津山駅

5 蒸気機関車 C1180



5-① 蒸気機関車 C1180

昭和 10 (1935) 年 3 月 30 日、日立製作所笠戸工場で製造され、松山機関区、三次機関区を経て昭和 23 (1948) 年、津山機関区に配属された。昭和 37 (1962) 年の岡山国体ではお召し列車、昭和 46 (1971) 年には津山線の SL さよなら列車を牽引した。会津若松機関区に転出し昭和 49 (1974) 年、日中線の SL さよなら列車を引いた。昭和 51 (1976) 年、津山市立南小学校に静態保存されたが平成 29 (2017) 年 8 月 9 日、津山駅前に移設された。

6 磯野家跡



6-① 椿高下城代町士邸略図
(湿地会誌より)

磯野計は安政 5 (1858) 年 8 月 14 日、現在の津山市椿高下で磯野湊の二男として生まれた。

7 立石岐先生顕彰之碑



7-① 立石岐先生顕彰之碑

立石岐の顕彰碑。平成 20 (2008) 年建立。津山市二宮。

8 立石家住宅



8-① 立石家住宅

立石岐の屋敷。正面に立石踏切がある。津山市二宮。

9 立石家墓所



9-① 立石家墓所

昭和 4 (1929) 年に逝去した岐ら立石家一族が眠る墓所。龍澤寺、津山二宮。

関連文化財群12 日本の近代化を支えた津山の洋学

概要

江戸時代、幕府はいわゆる「鎖国」政策によって海外との交流を厳しく制限し、西洋諸国では唯一オランダだけに貿易を許した。そのため、西洋の学問はオランダを通じて日本へもたらされ、「オランダ（和蘭・阿蘭陀）の学問」、「蘭学」と呼ばれた。やがて幕末にいたり、開国して様々な国の言葉や文化が伝わると、それらを包括して「西洋の学問」、「洋学」と呼ばれるようになっていく。津山藩からは、こうした蘭学・洋学を学び、日本の近代化に貢献した、優れた洋学者が数多く生まれている。西洋内科医学から植物学、化学をはじめて日本に紹介した宇田川家三代や、ペリー来航時にアメリカの国書を翻訳した箕作阮甫らである。江戸詰の藩医であった彼らは、江戸を舞台に活躍したが、国元津山にも足跡を残している。また、彼らの活躍に影響を受けて洋学を学び、地域の医療や教育に尽した人物もあり、各地にゆかりの史跡や資料が残されている。「津山の洋学」は、江戸時代後期から明治時代初期にかけての津山と日本を語るうえで、欠かすことのできない歴史なのである。

ストーリー

■蘭学の始まりと宇田川家三代

津山藩における蘭学研究の始まりは、江戸詰の津山藩医だった宇田川玄随（宝暦5（1755）年～寛政9（1797）年）である。玄随が20歳だった安永3（1774）年、杉田玄白らが『解体新書』を刊行、江戸で蘭学が興りはじめる。玄随は『解体新書』翻訳者たちとの交流を通じて蘭学の道へと進み、西洋医学がまだ外科や解剖学書しかない中で、日本で初めて西洋の内科医学書を翻訳、『西説内科撰要』と題して刊行した。

伊勢の出身で、玄随の養子となった宇田川玄真（明和6（1769）年～天保5（1834）年）は、西洋の解剖学、生理学、病理学を解説した『医範提綱』を刊行した。当時、西洋医学を志す多くの人に読まれ、「大腸」「小腸」「腺」「脾」など、この書で用いたことで、定着して現在でも用いられている名称が多くある。また、西洋の薬を紹介した『和蘭薬鏡』『新訂増補和蘭薬鏡』『遠西医方名物考』を刊行、そのかたわら箕作阮甫や緒方洪庵ら、蘭学の次世代を担う多くの弟子を育て、「蘭学中期の立役者」ともいわれている。

玄真の養子となったのが、大垣藩医江沢養樹の長男 榕菴（寛政9（1798）年～弘化3（1846）年）である。榕菴は玄真とともに薬学に取り組み、そこから植物学、化学へと研究を発展。いずれも日本最初となる、植物学書『植学啓原』、化学書『舎密開宗』を刊行して、細胞や柱頭・花柱、

日本の近代化を支えた津山の洋学



※番号は構成文化財の写真番号

さらに元素・酸素・窒素・炭素・酸化・還元等多くの植物学・化学の用語を考案した。西洋の文化への好奇心は蘭学者の中でも随一といわれ、音楽や地理、歴史、動物学、昆虫学等、多くの分野の原稿を残している。わずか19歳でコーヒーを研究して論文「哥非乙説」^{コッヒイ}を書き、「珈琲」の当て字を考案したのも榕菴といわれる。

この玄随、玄真、榕菴の3人で、西洋の内科医学から植物学、化学を日本に初めて紹介したことから、宇田川家三代は日本の近代科学を開いたと評価されている。宇田川家は、榕菴ののち、養子となった興斎^{こうさい}（文政4（1821）年～明治20（1887）年）が継いだ。興斎もまた優れた洋学者であり、幕末から明治初めにかけての約10年間は、藩主に従って津山で暮らしている。

■ 箕作阮甫と後裔たち

代々江戸詰であった宇田川家に対し、箕作阮甫^{みつくりげん ぽ}（寛政11（1799）年～文久3（1863）年）は国元の藩医の子として津山で生まれた。25歳で江戸へ出て宇田川玄真に師事し、一度は帰郷するものの、32歳で再び江戸詰を命じられ、以降は江戸で暮らしている。阮甫の業績の1点目は、医学や語学、地理、歴史等、多分野にわたる多くの翻訳書を作成し、西洋文化を日本に紹介したことである。これらの本は確認されているだけで99部160余冊あり、積み上げると背丈の高さを超えたという。2点目は黒船来航に際して、ペリーが持参したアメリカ合衆国フィルモア大統領の親書を翻訳し、ロシアのプチャーチンが来航した折には幕府の応接使に随行する等、幕末の対米露交渉に尽力したことである。さらに3点目は、幕府が洋学の研究・教育機関である「蕃書調所」^{ばんしょしらべしよ}を開いた際に教授職を命じられ、後進の育成を行なったことである。蕃書調所は幾多の改編を経て東京大学になることから、阮甫は「大学教授の第1号」ともいわれている。

阮甫の学究の精神は子孫へ引き継がれ、四女ちまと結婚した省吾（文政4（1821）年～弘化3（1846）年）は世界地図「新製輿地全図」^{しんせいよちぜんず}とその解説書『坤輿図説』^{こんよすしき}を刊行。坂本龍馬や吉田松陰ら幕末の志士たちに影響を与えた。三女つねと結婚した秋坪^{しゅうへい}（文政8（1825）年～明治19（1886）年）は、幕府の使節に随行して2度渡欧。明治維新後は私塾三叉学舎^{さんさ}を開いて大槻文彦や東郷平八郎、原敬ら多くの門人を育てた。省吾の長男麟祥^{あきよし}（弘化3（1846）年～明治30（1897）年）は、法制官僚としてナポレオン法典の日本語訳に取り組み、「動産」「不動産」等多くの法律用語を考案した。秋坪の次男大麓^{だいろうく}（安政2（1855）年～大正6（1917）年）は東京大学日本人最初の数学教授となり、のちに東京、京都両帝国大学総長、文部大臣を歴任。三男佳吉^{かきち}（安政4（1857）年～明治42（1909）年）もまた東京大学日本人最初の動物学教授である。四男元八^{げんぱち}（文久2（1862）年～大正8（1919）年）は東京帝大の西洋史学科教授となった。その他にも、様々な分野で活躍した多くの学者が生まれたことから、「箕作の血は学者の血」と言われるまでになっている。

■津山から世界へ

こうした宇田川家、箕作家の活躍に触発され、津山でも洋学を学ぶ人たちがいた。津山藩の御料理人の長男として生まれた津田真道（文政 12（1829）年～明治 36（1903）年）は、江戸へ出て箕作阮甫や伊東玄朴に師事し、幕末には幕府のオランダ留学生に選ばれて渡欧。帰国後は幕臣となり、明治政府にも登用されて司法の分野で活躍した。明治 23（1890）年には第 1 回衆議院議員選挙に当選し、初代副議長も務めている。

国元の藩医久原洪哉（文政 8（1825）年～明治 29（1896）年）の長男として津山で生まれた躬弦（安政 2（1855）年～大正 8（1919）年）は、上京して箕作麟祥や秋坪の塾に入門した。その後、東京大学化学科を第 1 回生として卒業し、アメリカ留学を経て東大、京都帝大の教授を歴任している。

中井和谷村（現在の美咲町）で生まれた岸田吟香（天保 4（1833）年～明治 38（1905）年）は、坪井下村（現在の津山市坪井下）の安藤家で学僕として学んだのち、津山城下、さらに江戸へ遊学。横浜の医師ヘボンの編纂していた辞書『和英語林集成』を手伝い、のちヘボンから習い覚えた処方箋で、日本で最初の液体目薬「精錡水」を販売した。わが国最初の邦字新聞「海外新聞」の刊行など、多彩な活躍をしている。

■在村蘭学の担い手たち

村や町で活躍した医師（在村医）たちにも、宇田川家・箕作家の門人がいる。仁木永祐（文政 13（1830）年～明治 35（1902）年）は、下津川村（現在の津山市加茂町）の豊田家に生まれ、臼山村（同津山市臼保）の医家仁木家の養子となった。18 歳で江戸へ出て箕作阮甫や宇田川興齋に学び、帰郷後は医業のかたわら臼山巒を開いて近隣の子弟の教育に努め、明治期には自由民権運動でも活躍して「美作板垣（美作の板垣退助）」と呼ばれた。

同じく箕作阮甫の門人である石生村（現在の勝央町石生）の原村元貞（文政 11（1828）年～明治 40（1907）年）や、杉田玄白の門人で宇田川玄真と親交があった岡村（現在の勝央町岡）の医師小林令助（明和 6（1769）年～嘉永 4（1851）年）、シーボルトの開いた鳴滝塾に学んだ石坂桑亀（天明 8（1788）年～嘉永 4（1851）年、現在の美咲町境出身）や石井宗謙（寛政 8（1796）年～文久元（1861）年、真庭市旦土）、長崎へ遊学した服部秀民（寛政 11（1799）年～天保 8（1837）年、津山市上野田）や高山俊斎（天保 3（1832）年～明治 3（1870）年、津山市井口）、京都の医家究理堂門人の江見敬輔（文化 14（1817）年～明治 20（1887）年、美咲町吉ヶ原）や岩本徳太郎（文化 15?（1818?）年～嘉永 7（1854）年、津山市里公文）、蘭漢折衷医である華岡青洲の医塾に学

んだ芳村 杏 斎（天保 7（1836）年～明治 38（1905）年、真庭市蒜山上福田）や山田純造（天保 7（1836）年～大正 5（1916）年、美作市海田）など、有名蘭学塾に学び、地域で活躍した医師たちは枚挙にいとまが無い。こうした人々が、江戸時代後期から明治時代初期にかけて群をなして現れ、学術文化の発展に貢献した。これが「津山の洋学」といわれるゆえんである。

構成文化財

① 宇田川家墓所（津山市西寺町 泰安寺）



1-① 宇田川家墓所



1-② 泰安寺宇田川家墓所

宇田川家の墓所はもとは東京の浅草誓願寺の塔中長安院にあったが、関東大震災で火を受け、昭和 4（1929）年に多磨霊園へ移された。平成元（1989）年、宇田川三代墓所移転実行委員会によって玄随・玄真・榕菴・榕菴と世與夫妻の墓所が津山市西寺

町の泰安寺に移された。津山で没した興斎の妻お梶と四男轍四郎の墓も泰安寺にある。

② 宇田川興斎屋敷跡（津山市北町）



2-① 宇田川興斎屋敷跡

参勤交代の制度が緩和され、藩主の国元滞在が長くなった文久 3（1863）年、宇田川興斎は藩命によって津山に居を移し、明治 5（1872）年に前藩主慶倫夫人に従い東京へ移るまでの約 10 年を過ごしている。平成 9（1997）年、屋敷跡の一角にあたる部分の土地が市へ寄贈され、津山市教育委員会によって解説板が建てられた。

③ 榎原箕作家屋敷跡と墓所（美作市榎原）



3-① 榎原箕作家屋敷跡と墓所

箕作氏は近江源氏佐々木氏の支族で、箕作山（現在の滋賀県）の城主となったことから、箕作を称した。織田信長の上洛に抵抗し、敗れて各地を転々とし、大坂冬の陣で豊臣方について再起を図ったが敗れて小豆島に逃れた。その後、阮甫から 4 代前にあたる泰連・義林兄弟が親族を頼って榎原上大谷（現在の美作市榎原）に居を移し、弟義林はさらに津山へ出て、兄泰連が榎原に残った。その榎原箕作家の墓所である。

④ 林田箕作家墓所（津山市林田）



4-① 林田箕作家墓所

津山へ出て森家に仕官した箕作義林から、その子で医業を始めた貞弁、貞隆、阮甫の父、貞固までの 4 代の墓所。平成 11（1999）年、阮甫の生誕 200 年に合わせて有志による整備事業が行われた。なお、阮甫以降の箕作家は、東京の多磨霊園と谷中霊園に墓所がある。

⑤ 箕作阮甫旧宅（津山市西新町）



5-① 箕作阮甫旧宅

元禄 10 (1697) 年の「町方改帖」に「本道 西新町 箕作玄甫」とあり医業を開いた貞弁の代から西新町に居住していたことが分かる。阮甫もここで生まれ、14 歳までを過ごした。昭和 17 (1942) 年、「箕作屋敷」と伝えられていた旧宅を津山市が買い上げ、昭和 50 (1975) 年 3 月に国指定史跡となり、翌年から解体復元された。

⑥ 砦部教諭所跡（真庭市砦部）



6-① 砦部教諭所跡

箕作秋坪の実父菊池士郎が学監を勤めた、庶民教化のための教諭所の跡。石垣は教諭所当時のものと伝えられる。教諭所は、幕府代官早川正紀が社会教化のために久世（現在の真庭市）に典学館をひらき、その都講として秋坪の曾祖父菊池正^{しょういん}因を招いたことにはじまる。のちに久世が津山藩の預かり領となったことで、文政 5 (1822) 年に砦部へ移され、名称も教諭所と改められた。秋坪の生誕地でもある。

⑦ 津田真道生家跡（津山市上之町）



7-① 津田真道生家跡

津田真道が生まれ、18 歳までを過ごした生家は現存していないが、その跡地には、平成 8 (1996) 年に津山市教育委員会が解説板を設置している。

⑧ 仁木永祐顕彰碑（津山市靱保）



8-① 仁木永祐顕彰碑

仁木永祐没後 24 年を経た大正 15 (1926) 年に、門人と有志からの寄附金で建立された顕彰碑。永祐門人の中島大次郎が建設委員長、安東久次郎ら 10 名余りが委員を務めた。題字は西園寺公望、碑文は早稲田大学教授の西^{はじめ}式、書は清水文造による。

⑨ 靱山巒跡（津山市靱保）



9-① 靱山巒跡

仁木永祐は江戸遊学を終えて帰郷したのち、23 歳で大坂へ出て後藤松陰から漢学を修得している。帰郷後私塾を開き、漢学や儒学、医学も教えた。万延元 (1860) 年には藩の許可を得て靱山巒を創設。当初は備中の林李溪を教授に招いたが、明治 2 (1869) 年から永祐が教授となっている。

☒ 久原躬弦・茂良生誕地（津山市二階町）



10－① 久原躬弦・茂良生誕地

久原躬弦と、躬弦の弟で医業を継いだ茂良は二階町で生まれた。現存する建物は、大正末期に茂良が神戸の洋館を参考にして建てたもの。平成 18 (2006) 年に二階町の町内会によって碑が建てられている。

11 岸田吟香生誕地の碑（美咲町栃原）



11－① 岸田吟香生誕地の碑

生家はすでに取り壊され、跡地は田畑になっている。現在、生誕地を示す石柱が建てられている。

12 岸田吟香記念碑（美咲町栃原）



12－① 岸田吟香記念碑

旭川ダムの湖畔にある岸田吟香の記念碑。昭和 26 (1951) 年に津山市に岸田吟香顕彰会が設立され、講演会、展覧会などの記念事業の一環として、吟香の出身地埴和村（現在の美咲町）の尽力で建てられたもの。碑銘は馬場恒吾、撰文は杉山栄による。

構成文化財（関係施設等）

① 箕作阮甫像（津山市大谷 津山駅前）



1－① 箕作阮甫像

平成 14 (2002) 年、津山市内の津山・津山鶴山・津山やよい・津山衆楽の 5 ライオンズクラブと津山ライオネスクラブが合同で建立した阮甫像。タイトルは「若き日の洋学者 箕作阮甫」。25 歳で洋書を手に江戸へ旅立つ、立志の姿である。田中彰氏制作。

② 岸田吟香記念館（美咲町西川）



2－① 岸田吟香記念館

吟香の出身地である美咲町の文化会館内に開設された資料館。吟香の書画や書籍、精錡水の引札や薬看板など多数の資料を収蔵し、吟香の業績を紹介している。

③ 津山洋学資料館（津山市西新町）



3－① 津山洋学資料館

昭和 53 (1978) 年開館。美作地域ゆかりの洋学者の資料を収集・保存・展示公開する。平成 22 (2010) 年に国指定史跡箕作阮甫旧宅の東隣に移転した。前庭には宇田川玄随・玄真・榕菴、箕作阮甫・秋坪、津田真道の銅像がならぶ。

④ 津山郷土博物館（津山市山下）



4－① 津山郷土博物館

昭和 26 (1951) 年に開館した津山郷土館を前身とし、旧市役所庁舎を改修して昭和 63 (1988) 年に開館した。津山藩の藩政資料（津山藩松平家文書、県指定重要文化財）を所蔵。

構成文化財（県外の関係史跡）

⑤ 津山藩鍛冶橋門内屋敷（東京都千代田区丸の内）

津山藩は元禄 11（1698）年に江戸城鍛冶橋門内に居邸を拝領、その後規模を拡大しながら上屋敷として存続し、明治を迎えた。宇田川家・箕作家はおもにこの鍛冶橋の藩邸に居住した。

5－① 津山藩鍛冶橋門内屋敷

⑥ 浜町屋敷（東京都中央区日本橋蛸殻町）



6－① 浜町屋敷

安政 3（1856）年拝領。明治元（1868）年、箕作秋坪がここに私塾「三叉学舎」を開いた。「三叉」の名称は、当時藩邸の前で隅田川が三つまたに分かれており、地名を三叉と呼んでいたことにちなむ。

⑦ 蕃書調所跡（東京都千代田区九段下）



7－① 蕃書調所跡

幕末に幕府が設けた洋学の研究・教育機関。安政 2（1855）年に古賀謹一郎が頭取を命じられ、安政 4（1857）年に開所。開所にあたり、箕作阮甫が教授職に任じられた。

⑧ お玉ヶ池種痘所跡（東京都千代田区岩本町）



8－① お玉ヶ池種痘所跡

安政 4（1857）年、箕作阮甫は伊東玄朴、戸塚静海ら同志とともに、天然痘予防のための種痘館の設立を発起し、幕府に請願書を提出した。翌年認可されて、お玉が池の川路聖謨の拝領地に種痘所が設けられた。このお玉ヶ池種痘所はのちに幕府の管轄（西洋医学所）となり、東京大学医学部の起源の一つとなっている。

第7章 文化財保存活用区域に関する事項

(1) 文化財保存活用区域の定義

文化財保存活用区域とは、文化財が特定の場所に集中している場合に、その周辺環境を含め当該文化財を核として文化的な空間を創出するための計画区域のことを言う。

(2) 文化財保存活用区域設定の意義

多様な文化財が集中する区域を文化財保存活用区域として保存・活用を行うことで、魅力的な空間の創出につながることが期待される。

(3) 文化財保存活用区域設定の考え方

津山城跡周辺に分布する国指定等の文化財を包含するよう設定した。

城下町時代の、町人地・社寺地・武家屋敷等の町割りを包含するよう設定した。

重要伝統的建造物群保存地区として選定された「城東地区」を包含するよう設定した。

津山市景観計画の景観形成重点地区を包含するように設定した。

(4) 文化財保存活用区域の名称

津山城跡及び津山市城東伝統的建造物群保存地区等を中心とした周辺地区（津山城跡とその周辺地区）。

(5) 文化財保存活用区域の概要

津山市の歴史的風致は、古来からの街道である出雲往来に関連して形成されてきた。慶長8(1603)年森忠政が美作国に入国し、津山城築城と同時に、津山城を中心に東西の寺町、職人町などをはじめとした城下町や往来が整備され、現在も続く津山の歴史的な町並みや文化の基礎が形成された。

さらに、明治以降の近代化の時代には、鉄道、教育、医療等様々な整備が進められた。これらの整備は、これまでの城下町の都市構造や文化を守りながら行われ、近代化遺産として本市の歴史的風致を高めていくことになった。

地形をみると、本市は中国山系など盆地を取り囲む山々や小丘や田園があり、また、吉井川、宮川、加茂川、皿川等の河川景観は豊かで、盆地内の多くの丘陵地やため池とともに多様な景観を形成している。

津山城下町は、今日に至るまで、戦災をはじめとする大きな火災に遭わなかったことから、

現在も、城下町の都市構造（曲がり等を含む城下町特有の通り、職人町等の町割り）や歴史遺産（城跡、町家、武家屋敷、寺社群や、それらが一体となった町並み）が数多く残る。

このようなまちを舞台に、人々のくらしの中に、津山まつり、寺社、往来、河川、鉄道にみる歴史的風致が形成されてきた。

（6）文化財保存活用区域の保存活用に関する方針

県、市指定文化財や国登録有形文化財建造物のうち歴史的風致の維持及び向上に寄与するものについて、積極的に歴史的風致形成建造物としての指定を図る。また、市指定の文化財は、史料の調査や修理事業等にあわせて現地調査を実施し、新たな知見に基づき価値の再評価を行う。

文化財の保存はその本質的な価値を維持することが絶対条件であり、その修理については現状修理を基本とし、建造物の解体修理など大規模な修理においては、詳細調査・史料調査及び耐震精密診断などを実施し、新たな知見に基づく文化財価値の再評価に努めるものとする。一方、歴史性を踏まえた文化財の整備においては、歴史的真正性を最大限確保するため、過去の調査記録等の成果を活用し、類例についての調査・研究も行ったうえで、それらの知見を踏まえた総合的見地から整備を図るものとする。

文化財を保存・活用しやすくするために、文化財の所在を示す公共サインの整備や統一、現地で内容が容易に理解できるようなコンテンツの充実を図る。特に、近年増加傾向にある、外国人旅行者に対して、最低でも4～5か国語でのコンテンツ整備の推進を図る。また、文化財を「群」として理解してもらうためには、回遊でき得るルートを設定することが必要であり、そのための環境整備を行うこととする。

歴史的風致の維持及び向上を図るための整備事業や文化財を活用するための便益施設を整備する場合は、文化財の本質的な価値を毀損しない事を大前提にしたうえで、周囲の景観や環境との調和を図ることとする。

城東伝統的建造物群保存地区では、江戸時代の城下町の町割りを色濃く残す町並みに暮らす住民の安全確保と文化財としての町並み保存を図るため、防災計画を策定し、防火・消防体制の強化や自然災害対策に取り組む。

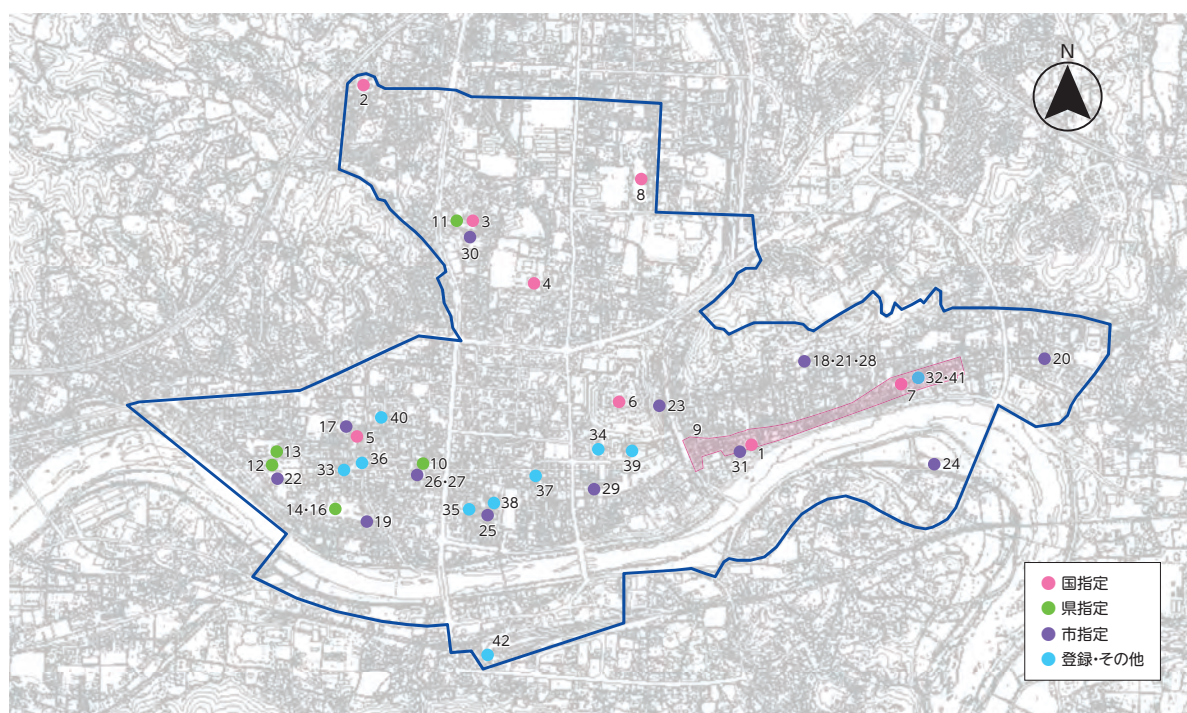
文化財の存在と価値について広く理解を得るため、文化財の公開に努め、誰もが文化財を気軽に見学し親しむことのできる機会を設定する。WEBサイトの充実により、文化財関連情報の積極的な発信を図るほか、地域計画策定に伴い調査した文化財についてデータベース化し、サイト上でだれもがアクセスすることができるように努める。

(7) 構成文化財一覧

番号	文化財の名称	類 型
1	旧苅田家住宅	重要文化財(建造物)
2	総社本殿	重要文化財(建造物)
3	鶴山八幡宮本殿	重要文化財(建造物)
4	岡山県立津山高등학교(旧岡山県津山中学校)本館	重要文化財(建造物)
5	本源寺本堂、庫裏、霊屋、霊屋表門、中門	重要文化財(建造物)
6	津山城跡	記念物(史跡)
7	箕作阮甫旧宅	記念物(史跡)
8	旧津山藩別邸庭園(衆楽園)	記念物(名勝)
9	城東重要伝統的建造物群保存地区	重要伝統的建造物群保存地区
10	徳守神社社殿	岡山県指定重要文化財(建造物)
11	鶴山八幡宮拝殿、釣殿及び神饌所並びに末社薬師神社殿	岡山県指定重要文化財(建造物)
12	妙法寺本堂	岡山県指定重要文化財(建造物)
13	愛染寺鐘樓門及び仁王堂	岡山県指定重要文化財(建造物)
14	泰安寺本堂及び表門	岡山県指定重要文化財(建造物)
15	津山だんじり	岡山県指定重要有形民俗文化財
16	津山藩松平家菩提所泰安寺	岡山県指定記念物(史跡)
17	森家大名墓	津山市指定重要文化財(建造物)
18	大隅神社神門	津山市指定重要文化財(建造物)
19	成道寺山門	津山市指定重要文化財(建造物)
20	旧妹尾銀行林田支店	津山市指定重要文化財(建造物)
21	大隅神社本殿	津山市指定重要文化財(建造物)

番号	文化財の名称	類 型
22	妙法寺鐘樓	津山市指定重要文化財(建造物)
23	千代稻荷神社本殿	津山市指定重要文化財(建造物)
24	八出天満宮本殿	津山市指定重要文化財(建造物)
25	妙願寺庫裏及び客殿	津山市指定重要文化財(建造物)
26	徳守神社摂社住吉神社本殿	津山市指定重要文化財(建造物)
27	徳守神社神輿	津山市重要有形民俗文化財
28	大隅神社神輿	津山市重要有形民俗文化財
29	津山城外濠跡	津山市指定記念物(史跡)
30	愛山松平家墓所	津山市指定記念物(史跡)
31	苅田家住宅及び酒造場	津山市指定記念物(史跡)
32	城東むかし町家	登録有形文化財(建造物)
33	作州民芸館(旧土居銀行本店)	登録有形文化財(建造物)
34	森本慶三記念館(旧津山基督教図書館)	登録有形文化財(建造物)
35	知新館	登録有形文化財(建造物)
36	翁橋	登録有形文化財(建造物)
37	江見写真館	登録有形文化財(建造物)
38	あけぼの旅館	登録有形文化財(建造物)
39	津山郷土博物館(旧津山市庁舎)	登録有形文化財(建造物)
40	旧中島病院本館	登録有形文化財(建造物)
41	旧梶村氏庭園	登録記念物(名勝地)
42	旧津山扇形機関車庫と転車台	鉄道記念物(西日本旅客鉄道株式会社)

文化財保存活用区域(津山城跡とその周辺地区)の文化財位置図



※ 15の津山だんじりは、だんじり保管庫などに保管されている。

